

大慶寺旧境内遺跡 (No.361)

寺分一丁目 943 番 2 外地点

例 言

1. 本報は、「大慶寺旧境内遺跡」(No.361)内、寺分一丁目943番2外地点における埋蔵文化財発掘調査の報告である。
2. 調査期間 2006年(平18)9月15日～2006年(平18)11月2日
3. 調査面積 56.10m²
4. 略 称 DT1943
5. 調査体制
担当 者 馬淵和雄
調 査 員 鍛冶屋勝二・松原康子・沖元道(資料整理)
調査補助員 鈴木弘太・森谷十美(資料整理)
作 業 員 鈴木啓之・丹野正弘・沼上三代治・渡辺輝彦(以上(社)鎌倉市シルバー人材センター)
6. 本報作成分担
遺構図整理 沖元
遺物実測 松原・森谷・沖元
同墨入れ 森谷・沖元
同観察表 森谷
同計量表 沖元
同写真撮影 沖元
原稿執筆 馬淵・沖元(担当部分末尾に記名)
編 集 沖元

縄文土器に関しては次の方々の御教示を得た。記して感謝したい。
大竹憲昭・小笠原永隆・劔持輝久・大工原豊

目 次 本 文 目 次

第一章 遺跡と調査地点の概観	228
1. 位置と地勢	
2. 歴史的環境	
第二章 調査の概要	234
1. 調査にいたる経緯	
2. 調査の経過	
3. 調査方法	
第三章 調査結果	236
第1節 概 要	
1. 層序と面の概要	
第2節 各 説	
1. I面	
2. II面	
3. III面	
4. IV面	
5. V面	
6. 最終深掘り坑	
第四章 まとめと考察	252
1. 遺構の変遷と年代	
2. 調査地点周辺の土地造成について	
3. 大慶寺と周辺の古道	

挿 図 目 次

図1 調査地点と周辺の遺跡・旧跡	229	図11 V面遺構全図、V面・落込み2出土遺物	246
図2 明治15年頃の調査地点周辺	232	図12 井戸1	247
図3 調査区設定図	235	図13 最終深掘り坑	248
図4 調査区・深掘り坑土層断面図	237	図14 遺構変遷図	253
図5 I面遺構全図、I面出土遺物	240	図15 調査地点周辺図	254
図6 II面遺構全図、 II面・集中出土2出土遺物	241	図16 調査地点周辺断面概念図	254
図7 III面遺構全図、III面出土遺物	242	図17 階段状造成模式図(1)	254
図8 溝1、同部材	243	図18 階段状造成模式図(2)	255
図9 IV面遺構全図、IV面出土遺物	244	図19 階段状造成模式図(3)	255
図10 落込み1出土遺物	245	図20 大正10年(1921年)の調査地点周辺	256
		図21 平成16(2004年)の調査地点周辺	257

表 目 次

表1 出土遺物観察表(1)	249	表3 出土遺物計量表	251
表2 出土遺物観察表(2)	250		

図 版 目 次

図版1	259	5-3 1区V面落込み2内遺物集中(南から)	
1-1 調査地点近景(北から)		5-4 1区V面落込み2内遺物集中(西から)	
1-2 調査地点近景(南から)		図版6	264
1-3 調査地点遠景(南西から)		6-1 1区V面落込み2内遺物(図11-16)	
1-4 東光寺境内所在板碑		出土状況	
図版2	260	6-2 1区V面井戸1(南から)	
2-1 2区I面全景(北から)		6-3 2区最終深掘り坑(西から)	
2-2 2区I面全景(南から)		図版7	265
2-3 2区II面全景(北から)		7-1 1区南壁土層	
2-4 2区II面遺物集中2(西から)		7-2 1区北壁土層	
図版3	261	図版8	266
3-1 2区II面遺物集中2(南西から)		8-1 2区北壁土層	
3-2 2区III面全景(北から)		8-2 2区最終深掘り坑北壁土層	
3-3 2区III面溝1(西から)		図版9	267
3-4 2区III面溝1(北から)		9-1 図15-イ 東光寺裏平場	
図版4	262	9-2 江ノ島道道標(1)(山崎)	
4-1 1区IV面全景(北から)		9-3 江ノ島道道標(2)(山崎・拡大)	
4-2 2区IV面全景(北から)		9-4 江ノ島道道標(3)(山崎・拡大)	
4-3 1区IV面落込み1内遺物集中(西から)		9-5 富士塚	
図版5	263	図版10	268
5-1 1区V面全景(北から)		出土遺物	
5-2 2区V面全景(北から)			

第一章 遺跡と調査地点の概観

1. 位置と地勢

地勢

横浜市南部から藤沢市東南部を南西の江ノ島付け根に向かって流下する柏尾川は、三浦半島を相模野台地から地勢的に分断し、両岸に50～80mの丘陵を形成する。鎌倉・藤沢の市境付近では、右岸（北・西岸）が坂東武士のふるさととして知られる村岡丘陵となり、左岸は鎌倉市の台峰から鎌倉・藤沢市境をまたいで江ノ島まで連なる片瀬丘陵となる。調査地点は台峰丘陵北西端にあって、柏尾川水系が左岸に開析した支谷の一つに位置する。

この支谷は柏尾川の開析した沖積平野に北面し、湘南モノレール湘南深沢駅から東に400m、湘南町屋駅から南に600mほどの場所になる。この支谷の入口南側にあるのが大慶寺で、調査地点は寺の山門から約100m南東の谷尻に近い北側山裾に位置している。現住所は鎌倉市寺分一丁目943番2ほか。付近の地表面の標高は15m前後、東の梶原山の山裾でもあり、谷を縦走する前面の道からの比高は1mほどある。大船から藤沢市川名にかけて広範に水面下にあった縄文海進期には、調査地点も汀線に程近かったであろう。

交通

調査地点を交通の面からみれば、およそ次のようになる。

長谷方面から大仏坂隧道を常盤に抜け、藤沢まで通じるバス通りがある（県道32号藤沢鎌倉線）。このバス通りに面して、八雲神社前の交差点から300mあまり先の右側（北側）に私立幼稚園があり、ここから山裾に沿うように路地が通じている。これが旧道で、バス通りの北側を西に進み、市立深沢小学校の先で藤沢方面への道から北に別れる。この道を北上すると200mほどで北に分け入る小道がある。小道に入って100mほどにある等覚寺という寺の門前を過ぎたあたりで右（東）に入り、さらに200m進むと右手（東南）に視野が開け、谷が広がる。この谷の入口右手にあるのが大慶寺である。

梶原山は近代の宅地造成により旧状をほとんど留めていないが、山上から調査地点の谷尻を経て、御霊神社の脇から現在の県道32号線に下りてくる道がおそらくあったはずである。この下り坂、またはその支線が大慶寺の谷に下りてきた、すぐの右側（東側）に調査地点がある。対面位置には東光寺がある。道は西北に開けた支谷の中心軸を縦走し、大慶寺と駒形神社の間を抜け、上述のバス通りから北上してきた道と交差し、200～300m先で柏尾川の形成した沖積平野に出る。いっぽうバス通りから分岐、北上してきた道は北西方向に曲がっていく。両者ともその先は近代の広大な工場や鉄道車庫に阻まれて接続はわからなくなるが、前者は現在の「古館橋」、後者は「町屋橋」あたりに渡河点があり、村岡丘陵に通じていたのだろう。

支谷の中には上掲の東光寺・駒形神社・大慶寺といった中世以来の社寺がある。調査地点の対面位置にあるのが東光寺で、現在の東光寺と駒形神社は西北にほんの70～80m、谷を出て西側にある等覚寺は、もと調査地点から東約200mの現深沢中学校の場所にあった。往時鎌倉西北部のこの狭い谷一帯に、かなり濃密な宗教的空間が形成されていたことがわかる。

2. 歴史的環境

鎌倉市の西側を北西に向かって伸びる台峰は、弥生時代から近世まで遺跡が豊富なことで知られ、過去にも数地点の調査事例がある。簡単に見ておきたい。



図1 調査地点と周辺の遺跡・旧跡 (1/5000)

大慶寺旧境内遺跡 (No.361) 本調査地点 寺分一丁目943番2
1. 寺分一丁目819-1 (1998瀬田) 押木2000「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書16-2」鎌倉市教育委員会
寺分藤塚遺跡 (No.360) 2. 寺分一丁目502-1他19筆76-7外 (1996土屋) 継他2002「鎌倉の横穴墓」東国歴史考古学研究所 3. 上町屋字谷戸781-2 (1988福田)
倉久保遺跡 (No.226.) 4. 山崎字富士塚868-82 (1998田村) 田村1999「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書16-2」鎌倉市教育委員会

天神山城 (No.384) 5. 山崎字宮廻760 (1995田代) 松山・浜野「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書13-1」鎌倉市教育委員会 6. 山崎字宮廻689-1 (2005齊木) 2009「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書25-2」鎌倉市教育委員会
天神山下城 (No.358) 7. 山崎字宮廻708-1 (1993田代) 田代1994「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書10-2」鎌倉市教育委員会 8. 山崎横穴群B (No.21) 9. 垣根谷横穴群 (No.45) 10. 上町屋横穴群 (No.35) 11. 大慶寺横穴 (No.154) 12. 昌清院東やぐら (No.237) 13. 陣出やぐら群 (No.130) 14. 藤塚西やぐら群 (No.433)

縄文時代

調査地点近辺では、北約1km付近の湘南町屋駅東側の台峰縁辺部の水道山遺跡で、標高15～16m前後の層から、中期前葉から後期中葉にかけての土器と石器が大量に出土している。土器は中期では曾利・加曾利E、後期は堀之内・加曾利B・称名寺などがある。石器は打製および磨製石斧・石垂・凹石などが採集されている。遺構は未検出ながら、近在に集落の存在することを予想させる (若松ほか2001)。

弥生時代

台山は弥生時代の遺跡に恵まれており、とくに調査機会の多い北面の字藤源治付近 (私立北鎌倉女学園一帯) に濃密な分布が示される (丑野1974 / 手塚ほか1985 / 齊木ほか1985 / 玉林ほか1988 / 宗墓1993 / 大河内1996 / 若松ほか1998)。本地点近在では、上記水道山遺跡の別地点で弥生時代中期後半～後期の集落が見つまっている。この遺跡では12軒の竪穴住居が検出され、後期の住居址からは鉄斧も出土した (齊木1980調査、未報告)。

古墳時代

上掲の台山弥生時代遺跡からはたいてい古墳時代の遺構・遺物が存在する。鎌倉市北部から藤沢市南部にかけては古墳時代後期の横穴墓が多数分布することで知られ、富士塚一帯でも6地点で確認されている。調査地点近在では北西約500mの寺分藤塚遺跡で、間口30mほどの狭い支谷の斜面に8基が群集しているのが発見されている (土屋ほか2002)。当然当該期集落の存在が予想される所であり、前出水道山戸ヶ崎遺跡や、本地点北約1kmの天神山城遺跡で古墳時代前期～後期の住居などが発見されている。

奈良～平安時代

律令時代前期まで鎌倉には東海道が通過していたことから、この時期の遺跡は鎌倉・藤沢両市内に数多い。台山一帯でも上掲の遺跡のほとんどでこの時期の住居跡が検出されている。調査地点付近はこの時代尺度郷に含まれていた可能性があるが、詳細については材料が不足している。

中世

平安時代後期、あらたに登場してきた「兵」が争乱の平定で名を上げ、国衙の軍制改革の中で押領使などとなって次第に地歩を固めていく。桓武平氏の祖として知られる高望王はその代表的な一人であり、関東八平氏の一つ、村岡氏の祖ともされる。高望王は桓武から四代目、寛平年間に朝敵を平定して平姓をもらい上総介となったと伝え、その後裔は坂東に土着して国衙官人になる。諸系図により異なるが、嫡子を平良茂 (『尊卑文脈』) あるいは良文 (『千葉大系図』『三浦系図』) と伝え、北武蔵村岡郷 (埼玉県熊谷市) を本拠として「村岡」を名乗るようになる。のち、子、または孫が相模東部三浦半島付け根の地に移り住み、その地はいつしか村岡 (神奈川県藤沢市村岡・弥勒寺) と呼ばれることになった。

村岡氏は鎌倉氏 (大庭氏)・三浦氏・千葉氏の祖ともいい、平安後期の坂東武士団にあってきわめて有力な幹流のひとつである。本調査地点の柏尾川対岸に当たる村岡丘陵が、桓武平氏村岡流の本拠とさ

れる。調査地点から2km北に、高望王の後裔の居館址と伝えられる場所もある(「村岡城址」)。また、1kmあまり西の柏尾川に「古館橋」という名の橋がかかっており、ここも村岡氏の館にゆかりの地と伝える。

鎌倉から藤沢・横浜に向かっては、道沿いに御霊神社が並ぶ。鎌倉権五郎景政(正)を祀る御霊神社は、鎌倉市坂ノ下から当地、そして横浜市戸塚区にかけて七社を数える。これらを結んだ線が、鎌倉氏の勢力範囲を示すと同時に鎌倉の西の境界をも示すのだろう。景政は大庭御厨の開発領主としても知られる。御厨の東の境界は、鎌倉市長谷の神明社から御霊社とほぼ同じ線を藤沢市川名付近まで向かい、境川と柏尾川の合流点以北は境川沿いにそのまま北上する。神明社は御厨の信仰の核なので、これはその四至の東側を示している可能性もある。一方御霊社の線は合流地点から柏尾川沿いに東行するので、平安時代後期の村岡は大庭御厨と鎌倉郡に挟まれた境界域に位置することになる。

本地点西南の小丘陵を越えたところに並ぶ深沢小学校と御霊神社は、鎌倉景政の後裔、梶原景時の邸跡と伝える場所である。この一帯には景時の影が濃く残る。小学校校舎裏の山裾には鎌倉時代後期の石窟墓「やぐら」があり、中におさめられた五輪塔は景時の墓と呼ばれている。塔そのものは景時から1世紀以上下の鎌倉時代末期の様式で、墓塔ではなく後代の人々が立てた供養塔とみななければいけないが、景時の出自は鎌倉氏であり、祖先鎌倉景政の開発した大庭御厨の一隅に居を構えていたのであろう。御霊神社にも「建武元年十二月廿三日」銘の五輪塔地輪がある(「建武元年」は1334年)。

『太平記』によれば、元弘三年(1333)、新田義貞軍を防ぐため、武蔵・相模・出羽・奥州の軍6万余騎を率いた執権北条守時は、5月18日洲崎に向かう。日に5・6度の白兵戦を敢行するも、ついに非勢とみて切腹し、侍大将南条高直ら90余人も自刃、攻撃軍はこの夜山ノ内まで侵入したという。『梅松論』には、

「武蔵路は相模守守時、洲崎千代塚において合戦をいたしけるが、是も討ち負て一足も退かず自害す。南条左衛門尉并入道一処にて命を落す」

とある。ここに見える「洲崎千代塚」については、寺分村あるいは台村南部に遺称地があったともいうが、現在は不明である。当時の洲崎は山崎村・梶原村・寺分村にまたがる広範囲な地名であった。

調査地点から北西500mの柏尾川河川敷に近い小丘陵には、高さ203cmの宝篋印塔がある。新田義貞鎌倉攻めの戦死者の骨を集めて供養のため立てたと言われるもので、「陣出の泣き塔」と通称される。

「願主行浄、預造立、石塔婆、各々檀那、現世安穩、後生善処 文和五年丙申二月廿日、供養了」の銘文があり、塔身に金剛界四仏の種子を刻む(「文和五年」は1356年)。寺院や廃寺伝承はないが、大慶寺の寺領を示す地名「寺分」にあるところから、何らかの関係があるかもしれない。

戦国時代以後

早雲庵宗瑞(伊勢新九郎長氏・「北条早雲」)は、明応七年(1498)、足利茶々丸を討滅して伊豆を平定したあと相模国に進む。文亀元年(1501)までに小田原を制圧し(黒田2005)、関東の動乱に乗じて相模東部の上杉支配地を次々に収めていく。当時三浦半島から相模東部にかけて圧倒的な勢力を有していた三浦道寸義同を平塚岡崎城に破ったのち、永正九年(1512)、鎌倉郡の西北玉縄に広大な城を築く。玉縄城は三浦半島の付け根にあって、三浦一族を半島内に封じるとともに、後北条氏にとり東相模経営のきわめて重要な拠点となった。いま旧状はほとんど失われているが、戦前の赤星直忠の縄張図や(赤星1959)、1955年撮影の航空写真によれば、村岡丘陵の複雑な地形を利用して、直径800mの環状をなす山稜内に本丸を置き、その外側に家臣などの居館を配し、さらにその外周にもうひとつ巻きの山稜を有する複郭構造を持つ。そしてそこから、支尾根を利用して周囲に放射状に郭を伸ばす強固な構造を有していた。さらに周囲の長尾台(横浜市)・御幣山(藤沢市)・二伝寺(藤沢市)・村岡(藤沢市)・天神山(鎌



図2 明治15年頃の調査地点周辺(『迅速測図』)(1/20000)

倉市)などに支城を配した(赤星1959)。天神山城は本調査地点から約1km北方に位置している。

大慶寺について

臨済宗円覚寺派、靈照山と号する。本尊木造釈迦如来は永禄十年(1567)仏師快円の作。開創時期は明確ではないが、開山は大休正念(浄智寺開山・円覚寺二世・建長寺三世・寿福寺六世)、開基は長井光禄とされる(「釈迦如来坐像胎内銘札」『神奈川県史 資料編』3-7572)。「弘安の初め」無象静照(浄智寺四世)がここに住した(『本朝高僧伝』)。元亨三年(1323)の北条貞時十三回忌に際して、道顕が砂金五両を納め僧衆83名が参列しているので、かなりの大寺だったことがわかる(「北条貞時十三年忌供養記」『県史 資料編』2-2364)。室町時代には関東十刹に列せられており(『扶桑五山記』)、寺格も高かった。延慶から元応年間(1308～1321)頃秋澗(礪)道泉が住山し、歴代住持は之庵道慣・傑翁是英ら彼の弟子が多い。方外庵(秋澗塔所)・覚華庵・本光庵(之庵塔所)・指月庵・天台庵・大堂庵などの塔頭があった(『新編相模国風土記稿』ほか)。

戦国時代には寺勢次第に衰え、後北条氏治世下の天文十六年(1547)、玉縄城主北条氏康は須崎(現洲崎)大慶寺分が以前から武蔵国比企郡三保谷の養竹院領だったことを認め、同院に安堵している(「帰源院文書」『鎌倉市史 史料編』2-460)。このとき奇文禅才を鎌倉に常住させているが、天文十八年にい

たつて、古河公方足利晴氏が禅才を大慶寺住持とした（「帰源院文書」『同前』2 - 461）。禅才は復興に尽くし、永禄十年（1565）本尊を再興したが（前掲「釈迦如来坐像胎内銘札」）、衰運止まらず、永禄九年（1566）北条氏政が円覚寺帰源庵に大慶寺分を安堵し（「帰源院文書」『同前』2 - 465）、その後天正にいたるまで大慶寺分は帰源庵のものだったようである（「帰源院文書」『同前』2 - 469・470）。帰源庵開山の傑翁是英が大慶寺の住持ともなったので、両寺の関係はその縁から生じたのであろうという（川副ほか1959, 川副執筆分）。この辺りの字「寺分」は大慶寺の寺領であったことから来ている。

大慶寺は江戸時代には廃絶、方外庵のみ残った。延享四年（1747）、方外庵主是性は大休正念坐像（現帰源院蔵）を再興し（前掲「釈迦如来坐像胎内銘札」）、さらにその後「大慶寺」の寺名を復興した。現在寺域内本堂裏には臨濟禅に特徴的な柏檜の大木があり、その脇に2基の宝塔が立っている。宝塔は2基とも安山岩製で総高131cm（右）と106cm（左）、いずれも相輪が破損しており、左側の塔のそれは後補である。復元すればほぼ同じ大きさになろう。鎌倉時代末期の宝篋印塔などに通有の関東様式の下半部を備える。すなわち、基礎、反花座下部ともに二区に分け、後者には格狭間が刻まれる。また背後の崖裾には数基の「やぐら」も見られ、鎌倉時代後期のこの寺のありようを窺わせる。

近在の寺社

東光寺 調査地点の対面位置にある古義真言宗寺院。天照山薬王院東光寺と号し、高野山派、もと手広青蓮寺末。永享三年（1431）、高野山慈眼院の法印靈範が隠居所として中興したという。現在の本尊は不動明王だが、薬王院というから薬師如来を本尊としていたのであろう。来歴はよくわかっていないものの、古くからの寺である可能性がある。

駒形神社 本調査地点から西北約70mの山腹にある。寺分鎮守、祭神は馬を保護する靈験を祀る駒形大神、もとは邇々芸命と伝える。社伝によると治承年中大庭景親の所領で、天候不順のときには代参が詣でて祈願したという。大庭景親の所領ということは、ここが鎌倉時代まで大庭御厨に属していたということだろうか。大庭氏の祖鎌倉景政を祀る御霊神社（後述）が近隣にあるので、可能性は高い。

等覚寺 いま調査地点の支谷を出た南側山裾にあるが、もとは現在の深沢中学校の場所にあり、御霊神社と境を接していた。中学建築の際現在地に移転した。休場山弥勒院等覚寺と号する。古義真言宗、もと青蓮寺末、今高野山宝珠院末。応永年間、秀恵僧都が開いたという。本尊不動明王。

御霊神社 本調査地点から谷尻に上がり、深沢中学校西側の坂を下りた西側にある。調査地点からは直線距離で200mほどの距離しかない。梶原村の鎮守で祭神は鎌倉権五郎景政。坂ノ下から横浜市戸塚区にかけて残る7社の御霊神社を結んだ線が、鎌倉氏の所領を示しているのだろう。また長谷に始まる神明社を結ぶ線が藤沢市川名から境川沿いに北に延びるのは、鎌倉景政が開発領主となった大庭御厨の東限を示している可能性がある。

深沢御霊神社辺の字を梶原という。先述の通り、深沢小学校の地は梶原景時の居館と伝わり、すぐ脇に景時の墓とされるやぐらおよび五輪塔がある。やぐらも五輪塔も実際には鎌倉時代後～末期造立の供養塔であるにしても、この一帯に彼の存在感が際だって濃いのは確かである。鎌倉時代後～末期であれば景時死後1世紀あまりしか経っていない。里人の記憶に彼の邸の記憶は依然鮮明であっただろう。深沢小学校校地をそう伝えるのは、あながち伝承とも言いきれまい。

（馬淵）

第二章 調査の概要

1. 調査にいたる経緯

寺分一丁目943番2ほかで個人専用住宅建設の照会があった。当該地点は大慶寺旧境内遺跡（No.361）として県遺跡台帳に登録されている周知の遺跡であるため、2006年5月16・17日に2×3mの試掘坑を設定して調査した。深さ240cmまで掘削した結果、地表下約140cmで遺物散布面を確認し、さらに少量ながら遺物を包含する層が下に続くことが確認できた。

建築計画では鋼管杭の打設による基礎工事を伴い、遺構の損傷は避けられないが、強度維持の関係上設計変更は困難なため、記録保存のための本発掘調査が実施されることとなった。調査は同年9月15日に重機による表土の掘削から始まった。

2. 調査の経過

日誌抄

9月15日（金）	重機による掘削	10月20日（金）	Ⅱ区1面全景写真撮影
9月21日（木）	Ⅰ区1面全景写真撮影・平面実測	10月25日（水）	Ⅱ区2面全景写真撮影
10月4日（水）	Ⅰ区遺物散布面全景写真撮影	10月26日（木）	Ⅱ区3面全景写真撮影
10月10日（火）	Ⅰ区落ち込み2写真撮影	10月27日（金）	Ⅱ区4面全景写真撮影
10月11日（水）	Ⅰ区南壁際深掘り	10月30日（月）	Ⅱ区5面全景写真撮影・調査区北壁分層と写真撮影
10月12日（木）	Ⅰ区井戸1掘り上げ	10月31日（火）	Ⅱ区最終深掘り
10月13日（金）	重機により調査区反転	11月2日（木）	機材撤収
10月17日（火）	Ⅱ区土塁状遺構写真撮影と平面実測		

3. 調査方法

掘削方法

掘削にあたって、残土は場内処理とし、置場を確保するため建設予定範囲56㎡を南北に二分割し、前半を「Ⅰ区」、後半を「Ⅱ区」とした。作業効率を考慮して、分割は均等ではなく、前者を後者に比べいくらか広く取った。

測量基準の設定

ここでは作業効率を考慮して、調査区長軸中心部を通る測量基準線と、それに直交する基準線を5mおきに配した。そして、のちこれらを世界測地系に座標変換するという方法を採用した。

調査区は以下の範囲内にある。

[エリア9] X - 74 037.55 ~ X - 74 049.45
Y - 28 219.75 ~ Y - 28 228.20

(馬淵)



図3 調査区設定図 (1/300)

第三章 調査結果

第1節 概要

1. 層序と面の概要

地表面と表土

地表面の標高は14.46 m～14.60 mほどで、ほぼ平坦な面になっている。表土層は山側から谷側へ傾斜しており、地滑り等の理由により一度埋没した後、平場が形成されたことが窺える。この表土層を20～40cmほど除くと、I面の土塁状遺構の頂部に到達する。

I面

表土層の下に現われる最初の面で、標高13.45 m（西北）～13.85 m（東南）程度。黄灰色砂質土ないし明褐色砂質土で構成される面に土塁状遺構が構築されている。土塁状遺構の西側（谷側）よりも東側（山側）のほうが、調査区北側（谷口側）よりも調査区南側（谷尻側）のほうが標高が高くなっており、本来の地形の影響を受けている可能性が考えられる。

II面

I面を5 cm～28cm掘り下げた、標高13.33 m（西北）～13.76 m（東南）に褐色の砂質土が現れる。遺構は非常に少ないが、土師器皿片を中心とする遺物片が大量に含まれる粘質土層も検出されたためこれをII面とし、一度精査した。I面と同様、調査区東南隅から調査区西北隅へとゆっくりと傾斜している。

III面

II面を構成する砂質土を剥がすと、標高13.19 m（西北）～13.68 m（東南）程度で青灰色ないし暗灰色の粘質土が現れる。特に2区において部材を残す溝が検出され、これをIII面とした。I・II面と同じように調査区東南隅が最も標高が高く、調査区西北隅が最も標高が低い。

IV面

III面構成土は10～50cmほどの厚みがあり、これを除くと標高13.08 m～13.44 mほどで粘性の強い暗灰色粘質土や青灰色砂質土が現れ、方形状の落込みが確認されたのでIV面とした。

V面

標高12.80 m（南側）～13.15 m（北側）ほどの、IV面の遺構底部で既に確認されていた黒灰色粘質土を広げていくと東側（山側）へ落ちる落込みが確認されたので、これをV面とした。平面的に遺構を確認したのはこの面までである。

最終深掘り坑

V面で規制深度に達したため、これ以下は深掘り坑により下層の土層堆積を把握した。

遺物の出土がなかったため、V面より下層はすべて自然堆積によるものである可能性を否定できないが、確実に自然堆積（地山）と確認した層は標高12.08 m～12.23 mにかけて堆積する12層（II区最終深掘り坑北壁土層断面図）から下層である。12層からV面までの堆積層には炭化物や泥岩粒・凝灰質砂岩粒などが混入しており、自然堆積だとしても地滑り等の要因による堆積の可能性が考えられる。

（沖元）

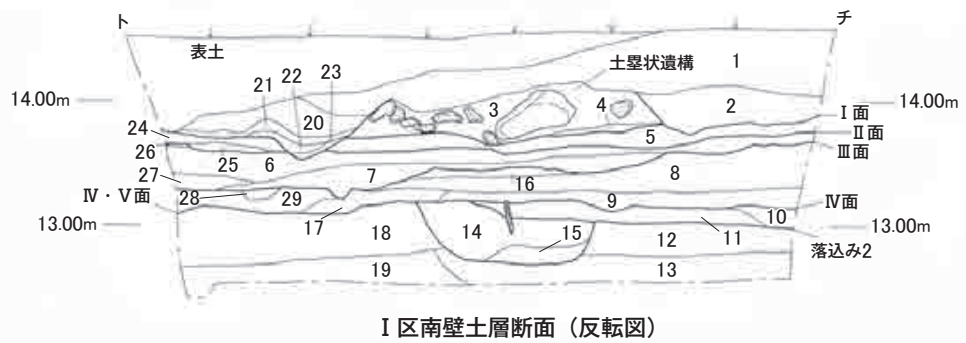
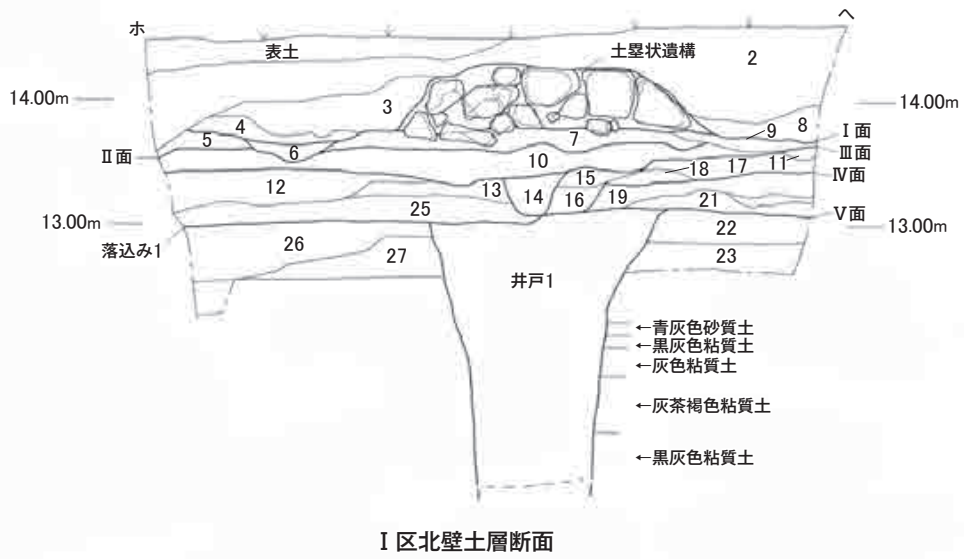
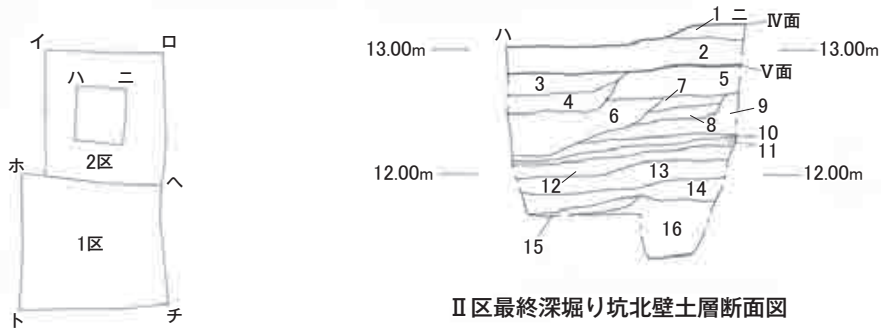
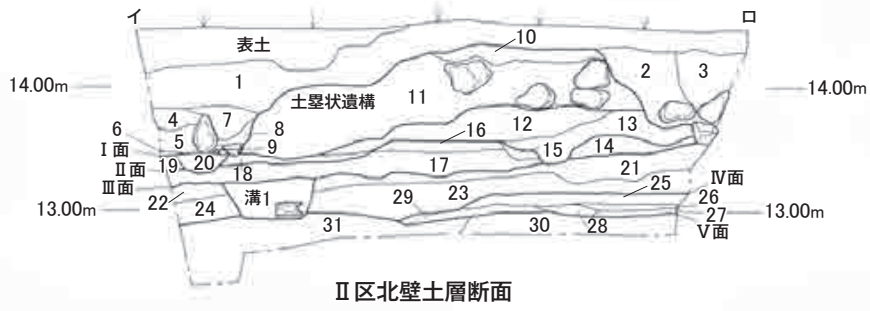


図4 調査区・深掘り坑土層断面図

1区北壁土層断面

1. 黄茶褐色の粗い砂質土 拳大位までの凝灰質砂岩多く含む
2. 拳大～枕大の凝灰質砂岩多量につまる 明茶褐色の粗い砂質土、鉄分、茶褐色粘質土塊含む
3. 2に似る
4. 拳大～半人頭大の凝灰質砂岩、泥岩の間にしまり弱い灰茶色砂がつまる。泥岩粒含む
5. (黒) 暗褐色粘質土 鉄分塊・白スコリア粒・炭化物・明茶褐色粘質土塊含む、しまり良い
6. 灰茶褐色弱粘質土 褐鉄粒・炭化物含む、しまりやや弱い
7. 4に似るが拳大の凝灰質砂岩が4より多く全体につまる
8. 5に凝灰質砂岩片を含む
9. 凝灰質砂岩が平らにつまる
10. 20cm大の凝灰質砂岩・泥岩粒・黄茶褐色砂質土による地行状の層 しまり良い(土塁状遺構)
11. 大型凝灰質砂岩層 間に黄茶褐色砂質土の粗い砂質土がつまる(土塁状遺構成土)
12. 明茶褐色砂質土 泥岩粒・凝灰質砂岩粒・炭化物・褐鉄粒・暗灰色粘土塊含む、しまりやや弱い(上面I面)
13. 中型～拳大泥岩・凝灰質砂岩 黄灰色～青灰色の粗い砂質土が間につまる、しまり弱い(上面I面)
14. 灰茶色粘質土 砂粒・土師器皿小片多く含む、凝灰質砂岩粒含む、しまりやや弱い(遺物集中2)
15. 16に似る 土師器皿小片は含まない
16. 灰茶色砂質土 炭化物・土師器皿小片・凝灰質砂岩粒・褐鉄粒含む しまりやや弱い(上面II面)

2区最終深掘り坑北壁土層断面

1. 青灰色弱砂質土 = 2区北壁No.25(上面IV面)
2. 黒灰色粘質土 = 2区北壁No.30(上面V面)
3. 黒灰色粘質土 少量(2より多め)の灰色スコリア・泥砂粒・炭化物含む 粘性強
4. 黒灰色粘質土 3より含有量多く、色調は灰色が強い
5. 黒灰色粘質土 3・4より固くしまり、色調は灰色が強い スコリア・炭化物含む
6. 黒灰色粘質土 3～5より黒色強い 粘性は3～5より強いがやや軟質 微量のスコリア・炭化物含む
7. 黒灰色粘質土 6と同質 しまりは6より良く、色調は灰色が強い
8. 黒灰色粘質土 灰色スコリア多い、弱砂質土・炭化物・鉄分若干混入 しまり弱い

1区北壁土層断面

2. 黄茶褐色の粗い砂質土 拳大位までの凝灰質砂岩多く含む
3. 暗褐色弱粘質土に大型泥岩・大型凝灰質砂岩混ざる
4. 暗褐色弱粘質土 炭化物多く含む、泥岩粒含む
5. 明褐色弱砂質土 泥岩粒・鉄分多く含む(上面I面)
6. 明褐色弱砂質土 炭化物多く含む(小溝1)
7. 黄灰色弱砂質土 泥岩・凝灰質砂岩多量に含む、炭化物・鉄分含む(上面I面)
8. 黄灰色弱砂質土
9. 黄灰色弱砂質土 泥岩・凝灰質砂岩密に含む 地行状の層(上面I面)
10. 明茶褐色砂質土 炭化物・泥岩粒・凝灰質砂岩粒・鉄分含む(上面II面)
11. 青灰色弱砂質土 (上面III面)
12. 茶褐色弱砂質土 鉄分・泥岩粒・凝灰質砂岩粒・炭化物多く含む(上面III面)
13. 青灰色粘質土 泥岩粒・炭化物含む(上面III面)

1区南壁土層断面

1. 黄茶褐色の粗い砂質土 くるみ大～40cm位の凝灰質砂岩多く含む
2. 1に似る ややしり弱い

17. 明茶褐色砂質土 拳大凝灰質砂岩・5cm大の黒茶色粘土塊・褐鉄塊・土師器皿小片・炭化物・泥岩粒含む 間に褐鉄層をはさみ、その下層は青灰色を帯びる(上面II面)
18. 明茶褐色砂質土 炭化物・凝灰質砂岩粒・土師器皿細片含む しまりやや弱い(上面I面)
19. 18に似るが土師器皿細片は含まず、凝灰質砂岩含む(上面I面)
20. 20cm大の凝灰質砂岩つまる 間に黄灰色砂質土、灰茶色粘質土の混合、玉石・炭化物含む(小溝1)
21. 暗灰色弱粘質土 青灰色砂を多く含む、凝灰質砂岩粒・火山灰塊含む(上面III面)
22. 21にほぼ同じ(上面III面)
23. 暗灰色粘質土 凝灰質砂岩粒・白色スコリア含む
24. 23にほぼ同じ
25. 青灰色砂質土 凝灰質砂岩粒塊多く含む 地行状の層(上面IV面)
26. 暗灰色粘質土 青灰色砂塊多く含む、木片含む
27. 暗灰色粘質土 26より青灰色塊少ない
28. 暗灰色粘質土 青灰色砂塊はほとんど含まないが、火山灰塊少量含む しまりやや弱い
29. 黒灰色粘質土 青灰色凝灰質砂岩粒塊少し含む、白色スコリア含む しまり良い
30. 黒灰色粘質土 青灰色粘土わずかに含む 31より粘性強い(上面V面)
31. 黒灰色粘質土 白色スコリア少量含む(上面V面)

9. 黒灰色粘質土 微量のスコリア・炭化物含む 固くしまる
10. 青灰色弱粘質土 多くのスコリア・砂粒・黒色粘土塊・泥岩粒・凝灰質砂岩粒・炭化物混入
11. 黄灰色砂質土 スコリア・黒色粘土塊・黒色粒含む
12. 黒色粘土 スコリア微量に含む 粘性強い(以下地山)
13. 灰色砂質土 青灰色スコリア砂粒・黒色粘土・泥・凝灰質砂岩粒含む
14. 茶灰色粘質土 非常に多くの腐食自然木混入、黒色粘土塊・泥粒含む
15. 暗灰色粘質土
16. 灰褐色粘質土 14と同じ腐食木片と小石～人頭大の凝灰質砂岩混入
17. 黒色土 半鉄分化した腐植土混入

14. 青灰色粘質土 拳大の泥岩・凝灰質砂岩つまる(小穴)
15. 青灰色粘質土 (上面III面)
16. 暗灰色粘質土 泥岩粒・凝灰質砂岩粒・灰色粘土含む、遺物片・炭化物混入 粘性強い(落込み1)
17. 青灰色弱粘質土 炭化物・泥岩粒多く含む、鉄分含む、砂質土混入(上面III面)
18. 暗灰色弱粘質土
19. 暗灰色粘質土 炭化物・灰色スコリア・鉄分含む 粘性強い(上面IV面)
20. 黒灰色粘質土 炭化物・スコリア多く含む
21. 青灰色弱砂質土 鉄分・泥岩粒・凝灰質砂岩粒・木片含む
22. 黒灰色粘質土 灰色スコリア含む(上面V面)
23. 黒灰色粘質土 スコリア含む
25. 16と同質(落込み1)
26. 黒灰色粘質土 (上面V面)
27. 黒灰色粘質土

3. 黄茶褐色の粗い砂質土 最大70cm位の大きな凝灰質砂岩含む 1・2よりしまり強い(土塁状遺構)
4. 黄灰色砂質土 1cm前後の凝灰質砂岩粒含む

5. 黄灰色砂質土 きめ細かな凝灰質砂岩粒含む、鉄分含む固くしまる(上面Ⅰ面)
6. 褐色弱砂質土 炭化物・鉄分・礫片・泥岩粒・木片・粘土塊含む(上面Ⅱ面)
7. 明黄茶色粘質土 炭化物・泥岩粒含む 粘性強い
8. 青灰色粘質土 泥岩粒・砂粒・炭化物少量含む(上面Ⅲ面)
9. 暗青灰色粘質土 白色砂粒・木片・鉄分含む、黄褐色粘土粒少量含む
10. 黒灰色粘質土 (落込み2)
11. 暗青灰色粘質土 木片・遺物片・炭化物・白色粒・青灰色粘土塊含む(落込み2)
12. 黒灰色粘質土 炭化物・木片・青灰色粘土粒微量含む(上面Ⅴ面)
13. 黒灰色粘質土 白色スコリア少量含む
14. 黒灰色粘質土 青灰色粘土粒少量含む やわらかい土
15. 黒灰色粘質土
16. 青灰色粘質土 炭化物・鉄分・泥岩粒含む
17. 黒灰色粘質土 鉄分・青灰色粘土粒若干含む
18. 12と同質 青灰色粘土粒若干含む(上面Ⅳ・Ⅴ面)
19. 黒灰色粘質土 青灰色粘土粒微量含む 13より粘性強い
20. 黄灰色砂質土 小石～半人頭大の凝灰質砂岩・泥岩を多量に含む、炭化物・粘土粒を含む
21. 暗褐色粘質土 鉄分・泥岩粒を含む
22. 暗褐色粘質土 黄灰色砂粒・鉄分多く含む(小溝1)
23. 黄灰色砂質土 3に似る
24. 5と同質(上面Ⅰ面)
25. 黄灰色砂質土 3・23・24と同質 地行状の層
26. 25と同質
27. 6と同質 明茶褐色弱粘質土塊含む
28. 明灰褐色弱粘質土(上面Ⅲ面)
29. 暗茶灰色粘質土 炭化物・鉄分・泥岩粒若干含む(上面Ⅲ面)

第2節 各説

1. Ⅰ面

面の概要(図5)

検出高：13.45 m～13.85 m 面構成土：黄灰色砂質土・明褐色砂質土・明灰茶色砂質土 検出遺構：土塁状遺構1本・小溝1条・小穴1穴 Ⅰ面包含層出土遺物：常滑甕(1) Ⅰ面出土遺物：土師器皿R種小型(2) 特記事項：調査区の南側(谷尻側)のほうが北側(谷口側)よりも標高が高く、土塁状遺構の東側(山側)のほうが西側(谷側)よりも標高が高い。1の甕は常滑編年6b～7型式のもので13世紀末～14世紀前半のもの。2の土師器皿は13世紀末以降のもの。

土塁状遺構(図5)

位置：X(-74 038.10～-74 048.06) Y-28 221.36～-28 227.10 充填土：大型凝灰質砂岩及び大型泥岩と黄茶褐色の粗い砂質土 断面形：台形 規模：最大幅3.25 m×長さ(9.50 m)×最大高0.58 m 主軸方位：N-21.5°-W 出土遺物：凶化可能遺物なし 特記事項：大型の凝灰質砂岩と泥岩を中心に構築され、石と石の間に黄茶褐色砂質土がつまり、よくしまる。遺物片はほとんど混入しない。上面に柱穴を確認できなかったことから、築地の基礎である可能性は低い。

本来の山の等高線にほぼ平行する関係で構築されていることや、谷戸内に位置すること、山側のほうが標高が高いことから、防御を意識した施設というより、区画を意識して構築されたと考えべき。

小溝1(図5)

位置：X(-74 039.20～-74 048.26) Y-28 224.78～-28 227.95 充填土：黄灰色砂質土・明褐色砂質土 断面形：逆台形・深皿形 規模：最大幅0.61 m×長さ(9.50 m)×深さ0.14～0.19 m 主軸方位：N-21.5°-W 流下方向：南東→北西 出土遺物：凶化可能遺物なし 特記事項：土塁状遺構を挟んで東側(山側)よりも、小溝1のある西側(谷側)のほうが標高が低いことや、土塁状遺構と主軸方位がほぼ一致することから、土塁状遺構に付属する排水溝の可能性が考えられる。流下方向は谷尻側から谷口側へとなっており、自然地形と矛盾しない。

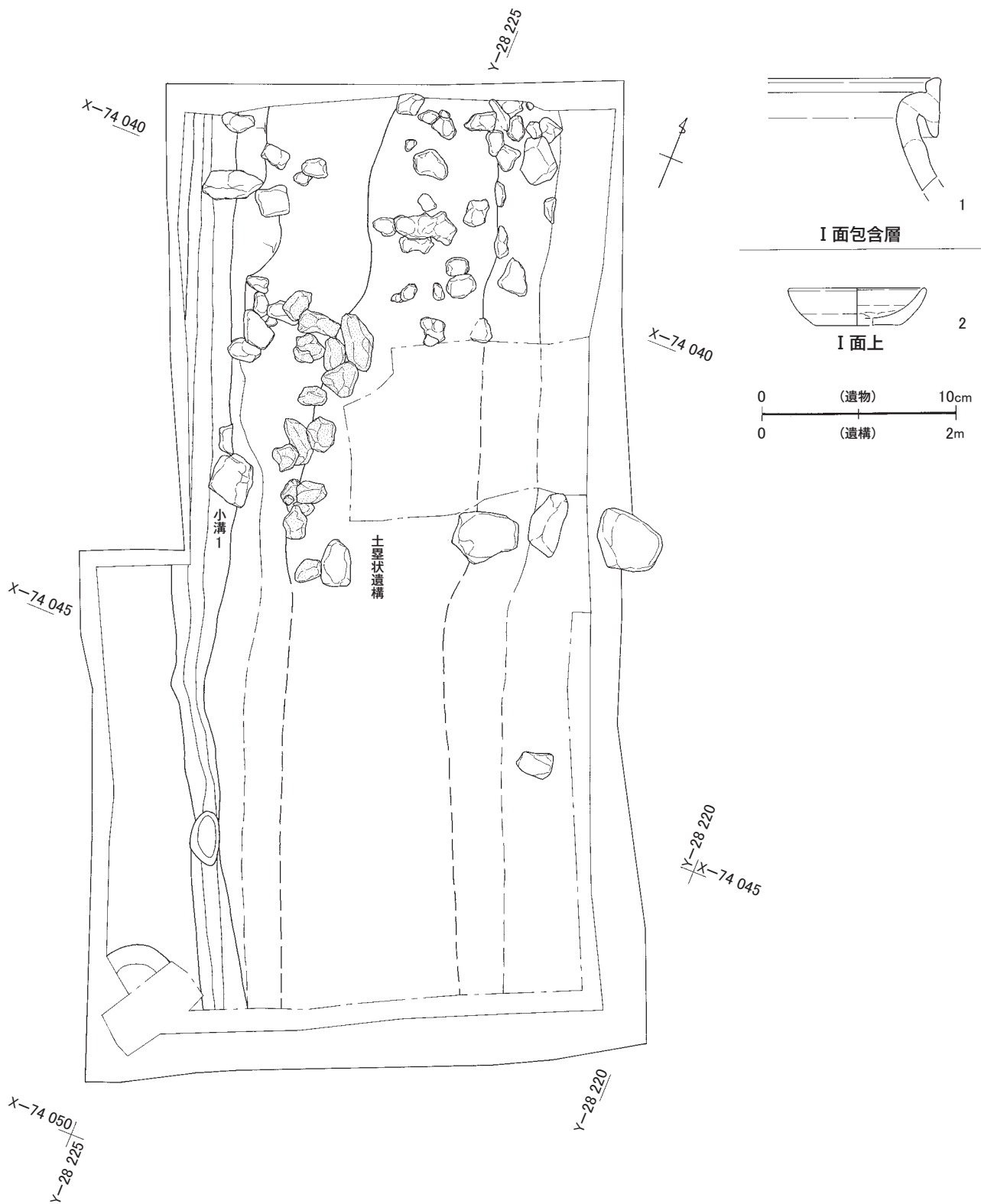


図5 I面遺構全図、I面出土遺物

2. II面

面の概要(図6)

検出高：13.33 m～13.76 m 面構成土：褐色砂質土・明茶褐色砂質土・灰茶色砂質土 検出遺構：遺物片集中出土1箇所・小穴1穴 II面包含層出土遺物：土師器皿R種小型(1) 特記事項：遺構が少な

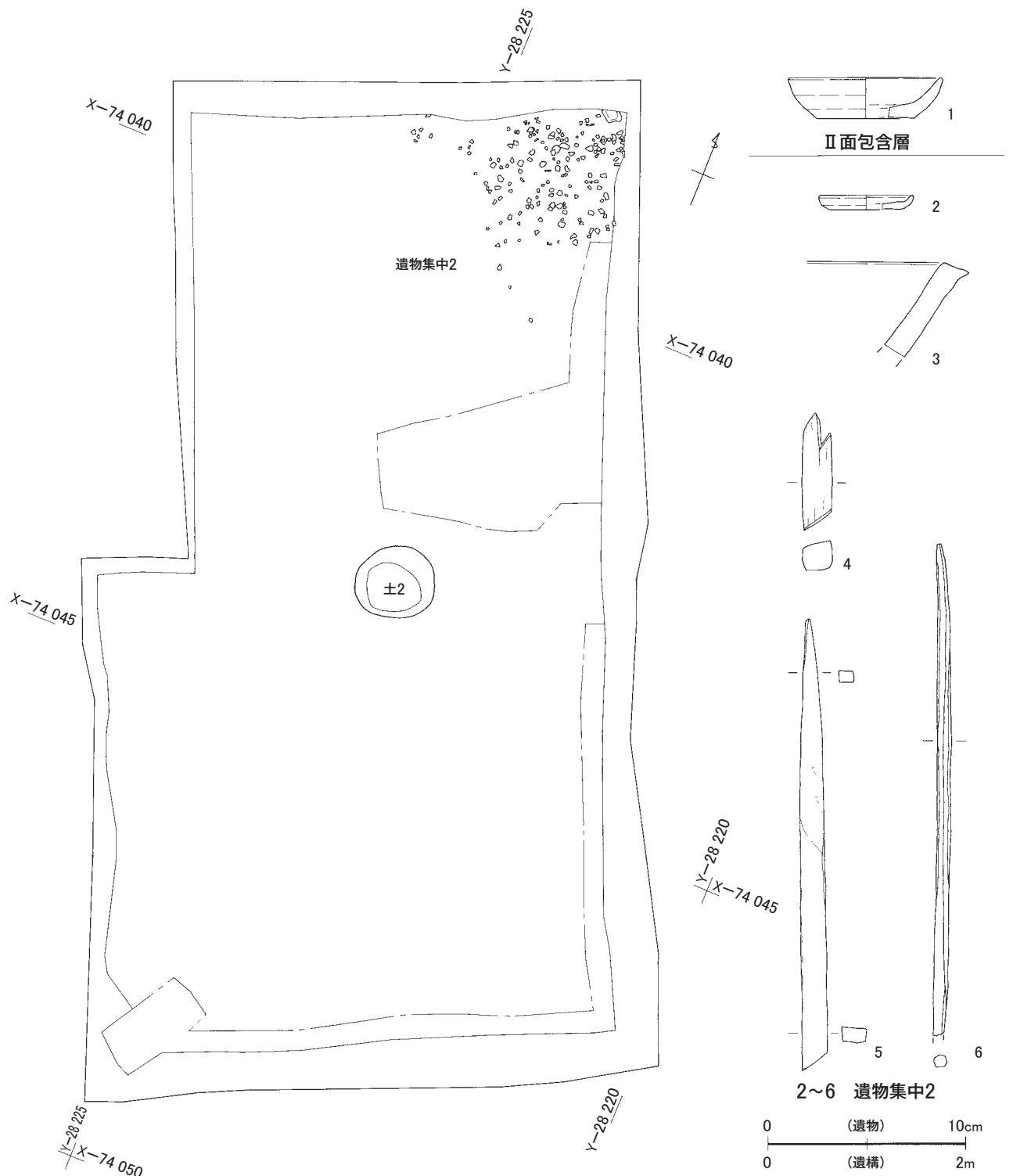


図6 II面遺構全図、II面・集中出土2出土遺物

いため、生活面であったかは不明。地行と地行の間を面として検出した可能性もある。1の土師器皿は13世紀末以降のもの。

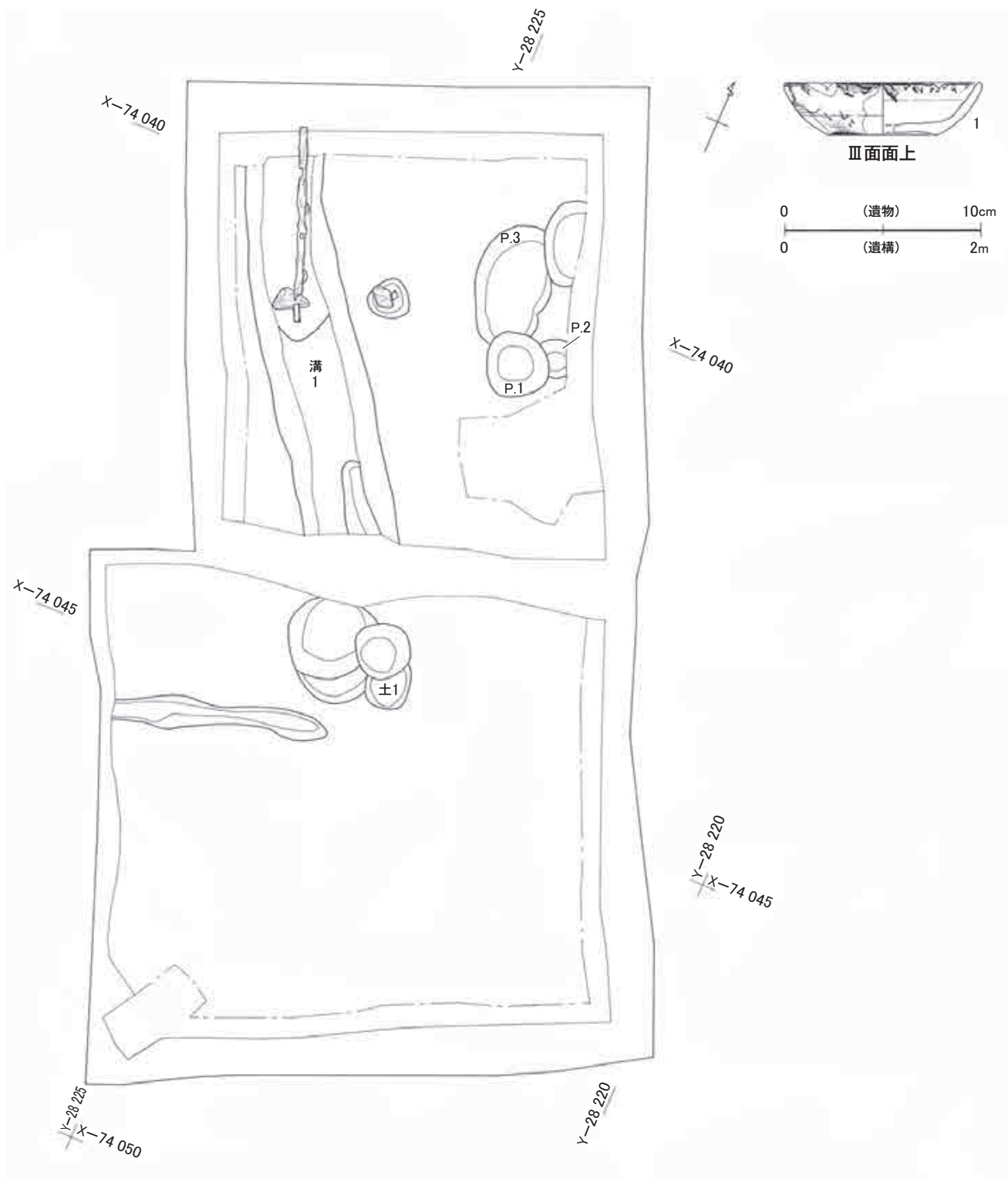


図7 Ⅲ面遺構全図、Ⅲ面出土遺物

遺物集中2 (図6)

位置: X - 74 040.29 ~ (- 74 037.92) Y (- 28 225.76) ~ (- 28 223.46) 充填土: 灰茶色粘質土 平面形: 不整形 規模: 南北(2.36 m) × 東西(2.31 m) 出土遺物: 土師器皿R種極小型(2)・常滑片口鉢Ⅱ類(3)・不明木製品(4)・串状木製品(5)・箸状木製品(6) 特記事項: 灰茶色粘質土に遺物破片が大量に混入。

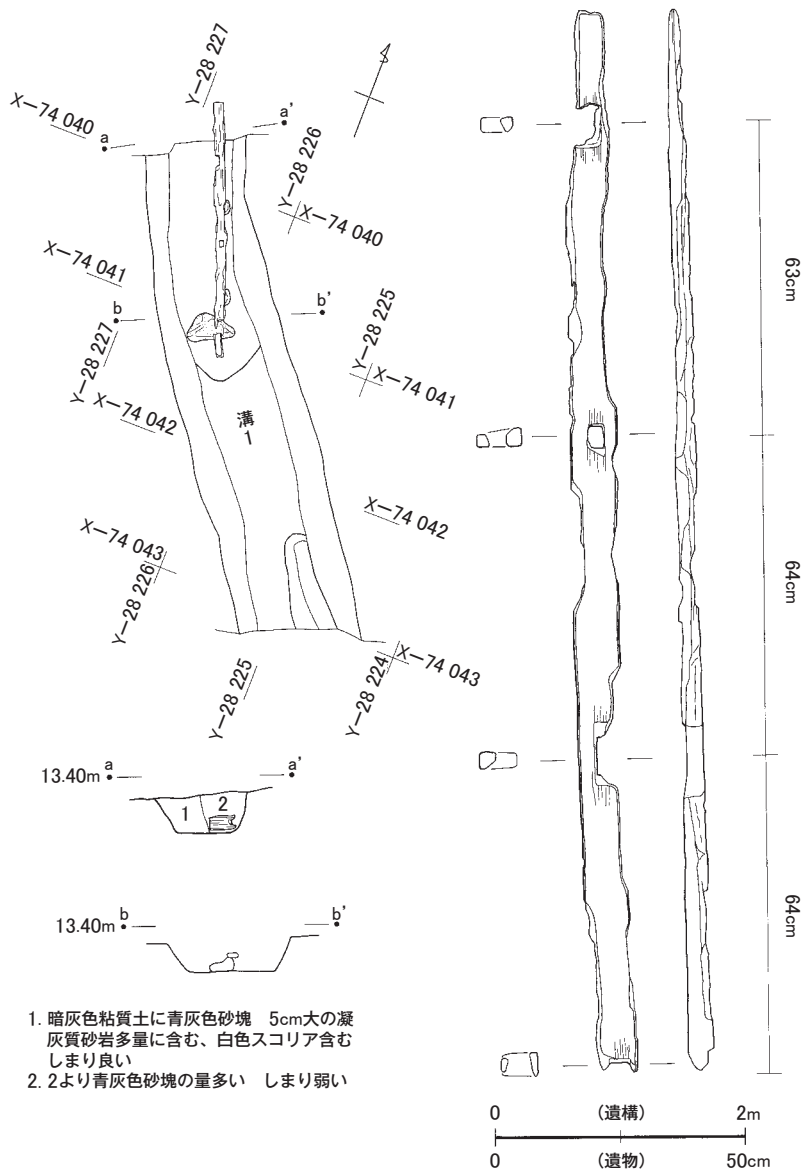


図8 溝1、同部材

は腐食が激しく、本来の形を留めていない。また、腐食により加工痕も明瞭に確認できず。流下方向は谷尻側から谷口側へとっており、自然地形と矛盾しない。また、上層で検出された土塁状遺構と軸方位が大きく変わらないことから、区画溝である可能性が考えられる。I区で検出されていないが、延長線上に土坑とした窪みがあり、これが続きかも知れない。

4. IV面

面の概要(図9)

検出高：13.08 m～13.44 m 面構成土：暗灰色粘質土・青灰色粘質土 検出遺構：落込み1基 IV面包含層出土遺物：土師器皿R種小型(1)・土師器皿T種大型(2)・棒状木製品(3)・不明木製品(4)・滑石製石鍋(5) IV面出土遺物：球状木製品(6・7)・不明木製品(8・9) 特記事項：調査区の大半を落込みが占めており、ほかの遺構は確認できず。1の土師器皿は13世紀中頃まで遡りうるもの。2の土師器皿は13世紀中頃までのもの。

地行の過程で遺物片の入った粘質土を部分的に充填した可能性もあり、面の遺構として評価できない可能性もある。3のII類片口鉢は9型式で15世紀前半に編年されているもの。

3. III面

面の概要(図7)

検出高：13.19 m～13.68 m 面構成土：青灰色粘質土・暗灰色粘質土 検出遺構：溝1条・小溝1条・小穴9穴 III面出土遺物：土師器皿R種中型(1) 特記事項：部材の残る溝が検出されたことから、一時期の生活面としてみてよいか。1の土師器皿は13世紀末以降のもの。

溝1(図8)

位置：X(-74 039.35～-74 043.27) Y(-28 224.29～-28 227.29) 充填土：暗灰色粘質土 断面形：逆台形 規模：最大幅1.02 m×長さ(3.96 m)×最深0.32 m 主軸方位：N-30°-W 流下方向：南→北 出土遺物：図化可能遺物なし 特記事項：溝1出土の部材

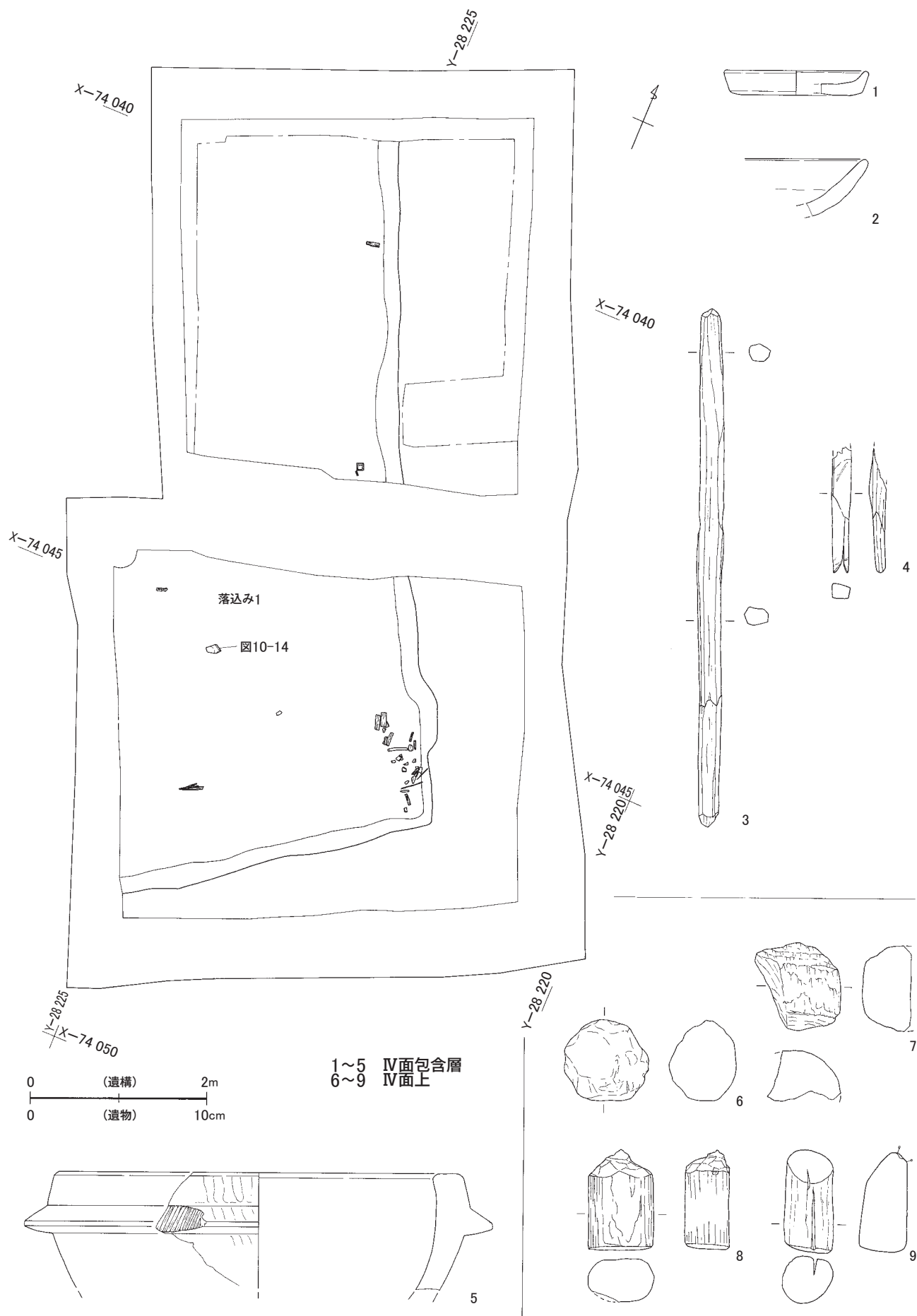


図9 IV面遺構全図、IV面出土遺物

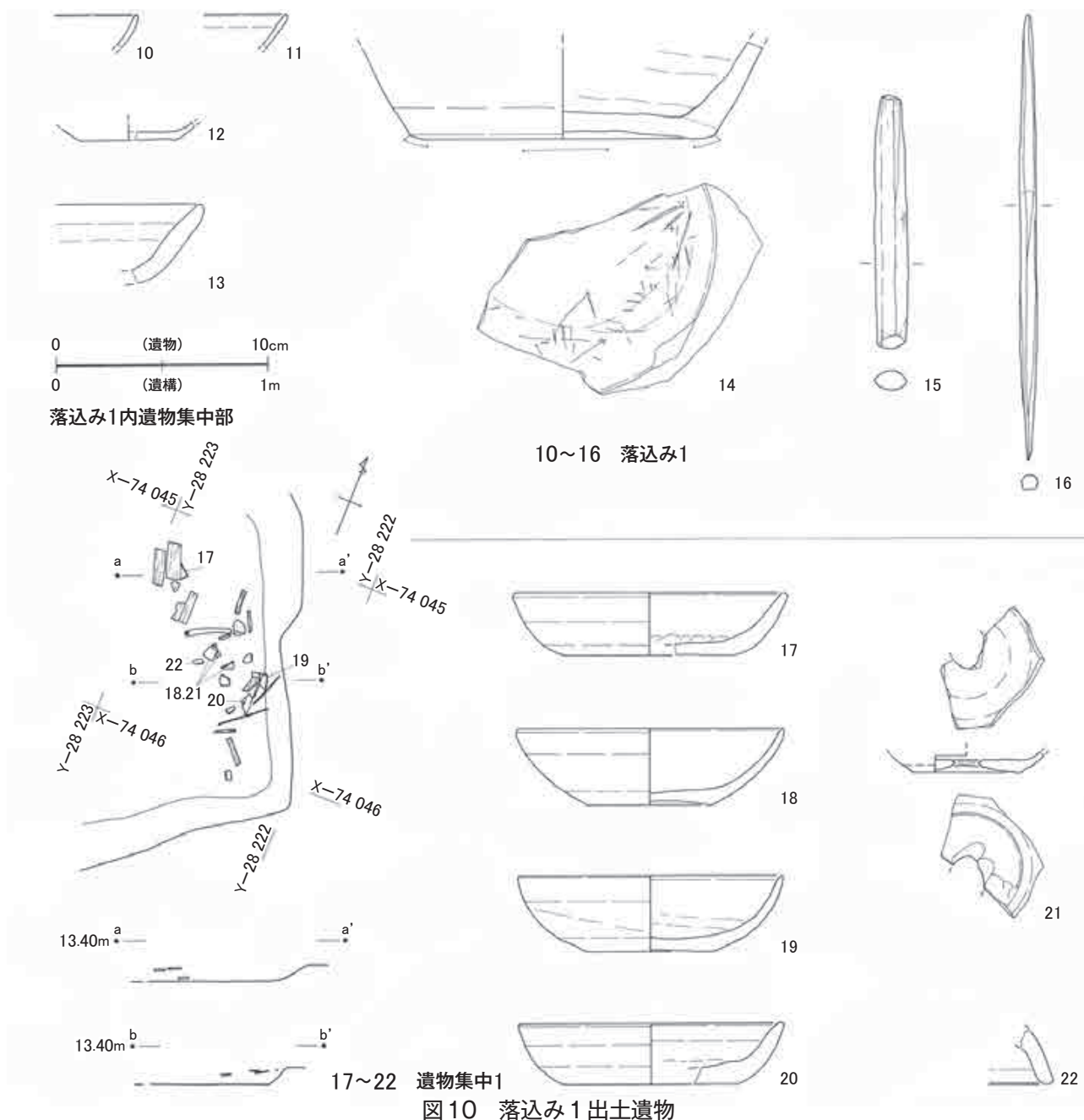


図10 落込み1 出土遺物

落込み1 (図9・10)

位置：X (-74 039.82) ~ (-74 048.19) Y - 28 222.01 ~ (-28 227.39) 充填土：暗灰色粘質土
 平面形：長方形？ 断面形：逆台形 規模：長さ(8.40m)×幅(3.63m) 主軸方位：N-28° -W 出土遺物：白色系土師器皿R種大型(10・11)・白色系土師器皿R種小型(12)・土師器皿T種大型(13)・常滑壺(14)・棒状木製品(15)・箸状木製品(16) 特記事項：調査区より西側(谷側)と北側(谷口側)に広がっており、平場を形成した際の段差を検出した可能性がある。13の土師器皿は13世紀中頃までのもの。14の常滑壺は外底部が摩耗しており、2次使用が考えられる。

落込み1内遺物集中1 (図10)

位置：X - 74 045.14 ~ -74 046.10 Y - 28 222.24 ~ -28 223.03 出土遺物：土師器皿R種大型(17~20)・土師器皿R種中型転用品(21)・土師器高台(22) 特記事項：落込み1の南東隅に遺物が集中して出土する範囲を確認した。20の型式の出現は13世紀第3四半期まで遡るものだが、17~19は13世紀末以降のもの。

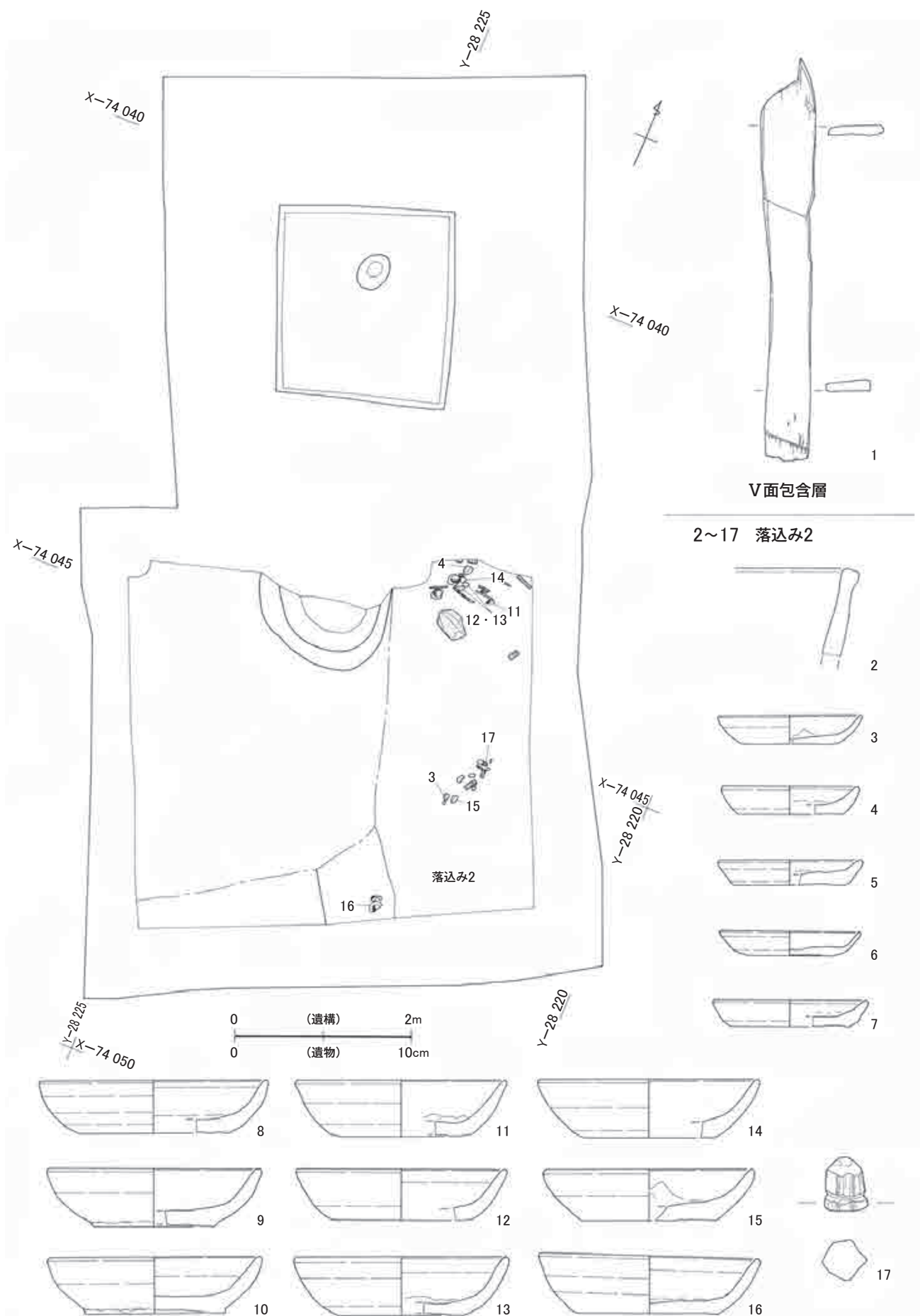


図11 V面遺構全図、V面・落込み2出土遺物

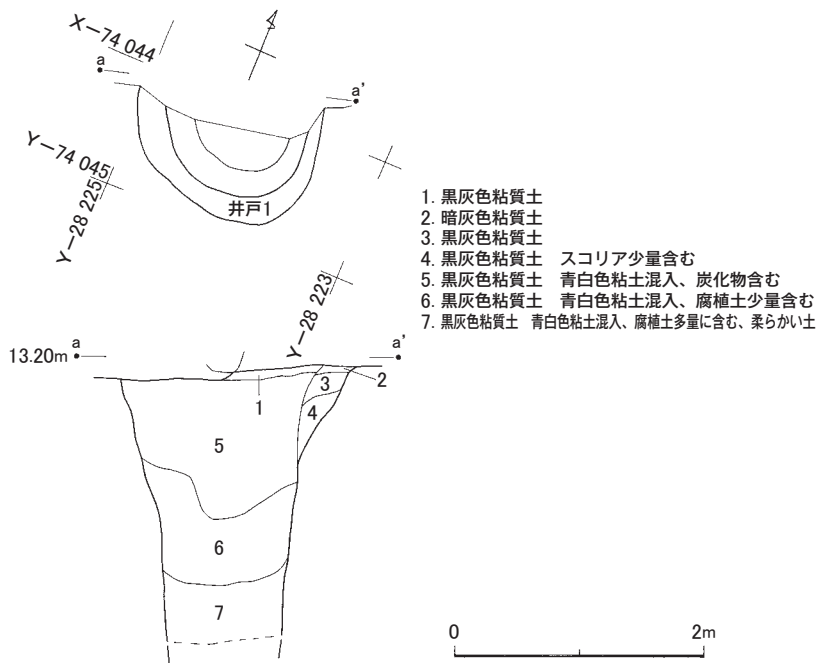


図12 井戸1

逆台形か 規模：長さ(4.00 m)×幅(2.46 m)×最深0.15 m 主軸方位：N-27° -W 出土遺物：縄文土器深鉢(2)・土師器皿R種小型(3～7)・土師器皿R種大型(8～16)・不明木製品(17) 特記事項：上層の落込み1により削平されており、正確な規模・形態は不明。落込み自体は山側へと落ちており、自然地形とは矛盾するが、検出範囲が狭小なこともあり、形成要因を明確にするまでには至らない。2の縄文土器は早期から前期の繊維土器。出土した中世土師器皿は13世紀第3四半期まで遡りうるものもあるが、その主体は13世紀末以降のものである。

井戸1 (図12)

位置：X - 74 043.77 ～ - 74 044.91 Y - 28 223.50 ～ - 28 225.04 充填土：黒灰色粘質土・暗灰色粘質土 平面形：円形 断面形：漏斗型 規模：長さ(1.04 m)×幅1.85 m×深さ2.20 m以上 主軸方位：N-13° -W 出土遺物：図化可能遺物なし 特記事項：壁際で検出されたこともあり、安全性を考慮して完掘しなかった。

6. 最終深掘り坑

概要(図4・13)

標高13.20 mほどのIV面から2.0 m×2.0 m四方で深掘り坑を開け、V面下からは2.0 m×1.0 mの広さで標高11.7 m(深さ1.50 m)ほどまで掘り下げた。前述したように遺物の出土がなかったため、人為的な作為の入った層か自然堆積か明確にできなかったが、標高12.08 m～12.23 mにかけて堆積する12層(図4・II区最終深掘り坑北壁土層断面図)から下層は確実に自然堆積(地山)であることを確認した。

調査地点より西方22 mほどにある、谷戸中央部を南北に縦断する道路面が標高12.00 m前後となることから、この12層以下を自然堆積(地山)と評価すること自体は必ずしも矛盾するものではない。

(沖元)

5. V面

面の概要(図11)

検出高：12.80 m～13.15 m 面構成土：黒灰色粘質土 検出遺構：落込み1基・井戸1基・小穴1穴

V面包含層出土遺物：木製品形代

(1) 特記事項：本地点において確認・調査した最終生活面。検出遺構自体は少ないが、井戸が検出されていることから、生活面として使用されていたことは確認できる。

落込み2(図11)

位置：X (- 74 043.07) ～ (- 74 047.59) Y (- 28 220.75) ～ - 28 223.21 平面形：不明 断面形：

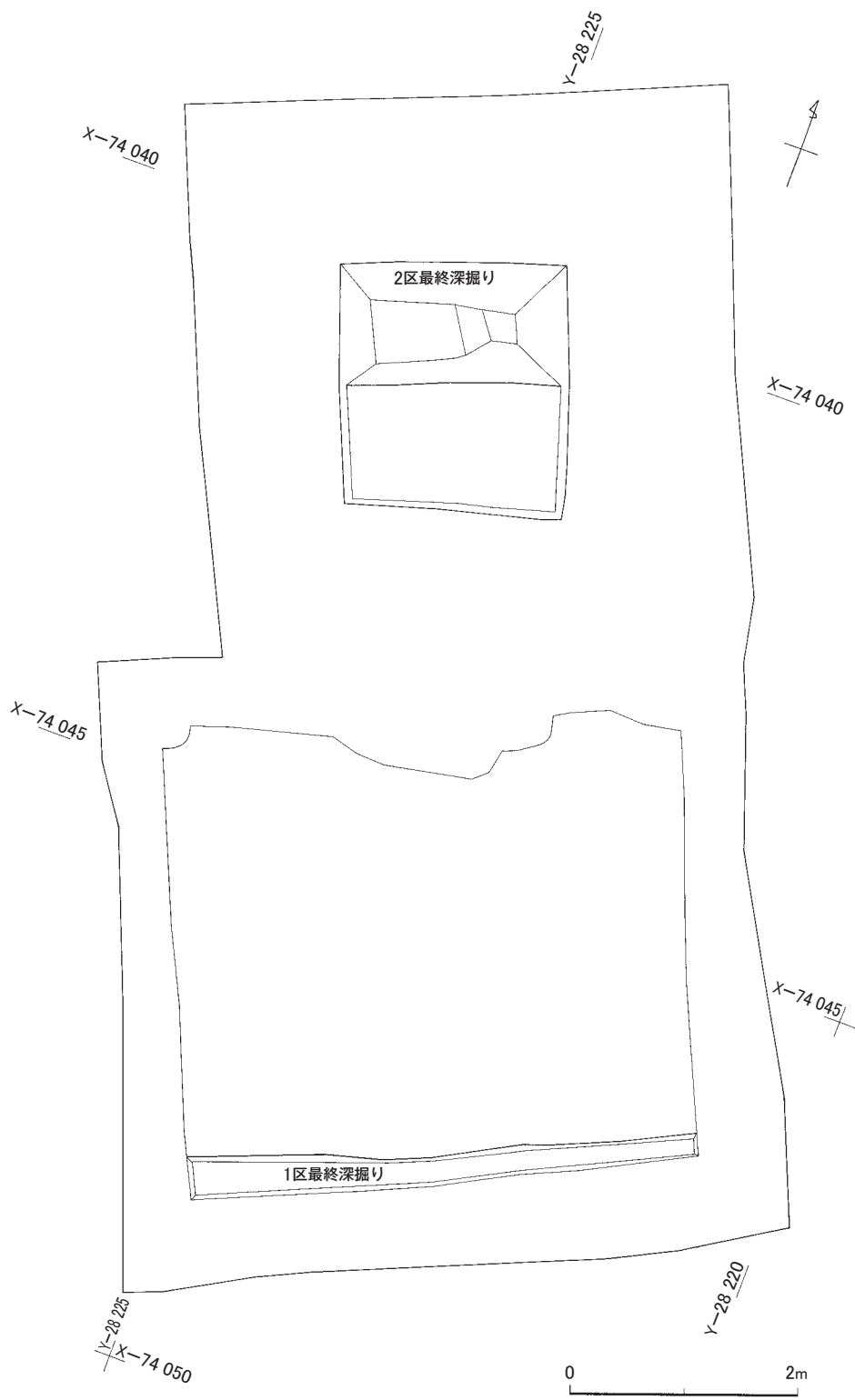


図 13 最終深掘り坑

表1 出土遺物観察表(1)

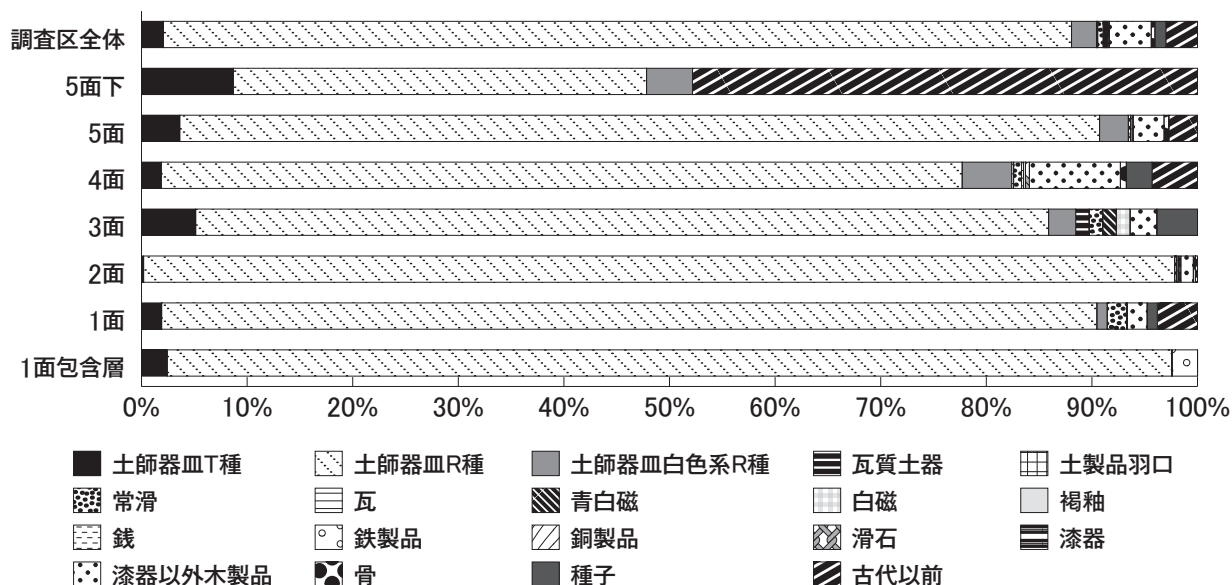
挿図番号	出土遺構	種別	備考
図5-1	1面 包含層	常滑 甕	口縁部片 輪積み成形 ヨコナデ 胎土は暗灰色で長石・石英・白色粒を含む 外面に黄灰白色の降灰がかかる 内面は赤茶褐色
2	1面上	土師器皿 R種小型	口径(7.2)cm 底径(4.2)cm 器高1.95cm 右回転ロクロ 外底部回転糸切り 内底部ナデ 胎土は橙色で黒雲母・赤色粒子・白色粒子・海綿骨針を含む
図6-1	2面 包含層	土師器皿 R種小型	口径(7.8)cm 底径(4.8)cm 器高2.1cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り・板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色で黒雲母・赤色粒子・白色粒子を含む
2	2面 遺物集中2	土師器皿 R種小型	口径(4.8)cm 底径(3.6)cm 器高8.0cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 内底部ナデ 胎土は橙色で黒雲母・赤色粒子・礫を含む
3	2面 遺物集中2	常滑 片口鉢Ⅱ類	口縁部片 輪積み成形 内面ヨコナデ 外面口縁部下までヨコナデ、胴部は指頭痕あり・板状工具による縦 位ナデ 胎土は茶褐色で微砂・礫・長石・白色粒を含む
4	2面 遺物集中2	不明 木製品	長6.0cm 幅1.5cm 厚さ1.5cm
5	2面 遺物集中2	串状 木製品	長23.2cm 幅1.3cm 厚さ0.8cm
6	2面 遺物集中2	箸状 木製品	遺存長(25.2)cm 幅0.7cm 厚さ0.6cm ほぼ完形 通常の箸状木製品よりも長い
図7-1	3面上	土師器皿 R種中型	口径(10.2)cm 底径(6.0)cm 器高2.7cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 内底部ナデ 胎土は淡橙色で黒雲母・赤色粒子・白色粒子・海綿骨針を含む 口縁～胴部に油煤附着
図9-1	4面 包含層	土師器皿 R種小型	口径(8.2)cm 底径(6.2)cm 器高1.4cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 内底部ナデ 胎土は淡橙色で黒雲母・赤色粒子・白色粒子・海綿骨針を含む
2	4面 包含層	土師器皿 T種大型	口縁部片 手づくね後内底部口縁部ナデ 内底部ナデ 胎土は黄橙色で黒雲母・赤色粒子・泥岩粒を含む
3	4面 包含層	棒状 木製品	遺存長(29.4)cm 幅1.5cm 厚さ1.0cm
4	4面 包含層	不明 木製品	遺存長(7.1)cm 幅1.0cm 厚さ0.9cm
5	4面 包含層	滑石製 石鍋	口径(22.6)cm 最大径(26.6)cm 銀灰色 内外面に煤附着 外面に作成時の工具痕があるが口縁頂部にはない 鏝部に目的不明の工具痕
6	4面上	球状 木製品	最大径4.9cm 球状に加工
7	4面上	球状 木製品	遺存径5.0cm 球状に加工
8	4面上	不明 木製品	長5.8cm 長径3.8cm 短径2.5cm 外面に加工痕
9	4面上	不明 木製品	長5.7cm 最大径3.0cm 外面に加工痕
図10-10	4面 落込み1	白色系土師器皿 R種大型	口縁部片 右回転ロクロ 胎土は黄灰白色で混入物少なく精良土
11	4面 落込み1	白色系土師器皿 R種大型	口縁部片 回転ロクロ 胎土は黄灰白色で混入物少なく精良土
12	4面 落込み1	白色系土師器皿 R種小型	底径(4.6)cm 右回転ロクロ 外底部回転糸切り 胎土は黄灰白色で混入物少なく精良土
13	4面 落込み1	土師器皿 T種大型	口縁部片 手づくね後内底部口縁部ナデ 内底部ナデ 胎土は黄橙色で黒雲母・赤色粒子を含む 二次焼成を受け薄く煤けている
14	4面 落込み1	常滑 壺	底径(14.5)cm 輪積み成形着 外底面に磨耗痕・使用痕があり底部片を転用した可能性もある 胎土は灰褐色で白色粒・礫を含む良土 器表は灰茶色 二次焼成で薄く煤が付く
15	4面 落込み1	棒状 木製品	長12.1cm 幅1.6cm 厚さ0.9cm
16	4面 落込み1	箸状 木製品	長21.3cm 幅0.8cm 厚さ0.7cm 両口
17	落込み1内 遺物集中1	土師器皿 R種大型	口径(13.0)cm 底径(8.0)cm 器高3.0cm 右回転ロクロ 外底部回転糸切り 内底部ナデ 胎土は黄橙色で黒雲母・赤色粒子・白色粒子・泥岩粒・海綿骨針を含む
18	落込み1内 遺物集中1	土師器皿 R種大型	口径(13.0)cm 底径(6.0)cm 器高3.5cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 内底部弱いナデ 胎土は淡橙色で黒雲母・赤色粒子を含む粉質の精良土
19	落込み1内 遺物集中1	土師器皿 R種大型	口径(12.6)cm 底径(6.2)cm 器高3.6cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 内底部ナデ 胎土は白橙色で黒雲母・赤色粒子・海綿骨針を含む粉質の精良土
20	落込み1内 遺物集中1	土師器皿 R種大型	口径(12.6)cm 底径(8.0)cm 器高2.9cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り・板状圧痕 内底部ナデ 胎土は黄橙色で黒雲母・赤色粒子・白色粒子・泥岩粒・海綿骨針を含む
21	落込み1内 遺物集中1	土師器皿 R種中型転用品	底径(5.0)cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 内底部弱いナデ 胎土は淡橙色で黒雲母・赤色粒子を含む粉質の精良土 底部中央付近に穿孔がなされている
22	落込み1内 遺物集中1	土師器 高台	脚部片 胎土は淡橙色で砂粒・雲母・白色粒・黒色粒を含む 器表は淡橙色 古代

表2 出土遺物観察表(2)

挿図番号	出土遺構	種別	備考
図11-1	5面 包含層	木製品 形代	長22.7cm 幅3.0cm 厚さ0.6cm 烏帽子をかぶった人形か
2	5面 落ち込み2	縄文土器 深鉢	口縁部片 輪積み成形 口縁端部にキザミがあるが摩滅により明瞭でない 胎土は茶褐色で繊維・砂粒・礫・雲母・白色粒・黒色粒を含む 器表は茶褐色 使用時または二次焼成の煤が付着 縄文早期～前期
3	5面 落ち込み2	土師器皿 R種小型	口径(8.2)cm 底径(4.6)cm 器高1.6cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り・板状圧痕らしきものあり 内底部ナデ 胎土は白橙色で黒雲母・赤色粒子・白色粒子を含む粉質の精良土
4	5面 落ち込み2	土師器皿 R種小型	口径(7.8)cm 底径(5.8)cm 器高1.6cm 右回転ロクロ 外底部回転糸切り 内底部ナデ 胎土は淡橙色で黒雲母・赤色粒子・泥岩粒・海綿骨針を含む
5	5面 落ち込み2	土師器皿 R種小型	口径(8.2)cm 底径(6.2)cm 器高1.4cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は黄橙色で黒雲母・赤色粒子・白色粒子・海綿骨針を含む
6	5面 落ち込み2	土師器皿 R種小型	口径(8.0)cm 底径4.8cm 器高1.4cm 右回転ロクロ 外底部回転糸切り・弱い板状圧痕 内底部弱いナデ 胎土は淡橙色で黒雲母・赤色粒子を含む粉質の精良土
7	5面 落ち込み2	土師器皿 R種小型	口径(8.8)cm 底径(6.8)cm 器高1.5cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り・板状圧痕 内底部ナデ 胎土は黄橙色で黒雲母・赤色粒子・泥岩粒・海綿骨針を含む
8	5面 落ち込み2	土師器皿 R種大型	口径(13.0)cm 底径(8.4)cm 器高3.0cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り・板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡橙色で黒雲母・赤色粒子・海綿骨針を含む
9	5面 落ち込み2	土師器皿 R種大型	口径(12.2)cm 底径(6.8)cm 器高3.3cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り・強い板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡橙色で黒雲母・赤色粒子・泥岩粒・海綿骨針を含む
10	5面 落ち込み2	土師器皿 R種大型	口径(12.2)cm 底径(7.8)cm 器高3.2cm 右回転ロクロ 外底部回転糸切り・板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡橙色で黒雲母・赤色粒子・泥岩粒・海綿骨針を含む
11	5面 落ち込み2	土師器皿 R種大型	口径(12.0)cm 底径(7.8)cm 器高3.2cm 右回転ロクロ 外底部回転糸切り・強い板状圧痕 内底部ナデ 胎土は鈍い黄橙色で黒雲母・赤色粒子・海綿骨針を含む
12	5面 落ち込み2	土師器皿 R種大型	口径(12.0)cm 底径(7.8)cm 器高2.9cm 右回転ロクロ 外底部回転糸切り 内底部ナデ 胎土は黄橙色で黒雲母・赤色粒子・白色粒子・泥岩粒・海綿骨針を含む
13	5面 落ち込み2	土師器皿 R種大型	口径(12.2)cm 底径(7.0)cm 器高3.3cm 右回転ロクロ 外底部回転糸切り 内底部ナデ 胎土は淡橙色で黒雲母・赤色粒子・海綿骨針を含む
14	5面 落ち込み2	土師器皿 R種大型	口径(12.6)cm 底径(7.6)cm 器高3.3cm 右回転ロクロ 外底部回転糸切り・板状圧痕 内底部ナデ 胎土は黄橙色で黒雲母・赤色粒子・泥岩粒・海綿骨針・礫を含む
15	5面 落ち込み2	土師器皿 R種大型	口径(8.0)cm 底径(7.6)cm 器高2.9cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り・弱い板状圧痕 内底部ナデ 胎土は黄橙色で黒雲母・赤色粒子・泥岩粒・海綿骨針を含む
16	5面 落ち込み2	土師器皿 R種大型	口径12.6cm 底径8.0cm 器高3.2cm 右回転ロクロ 外底部回転糸切り・弱い板状圧痕 内底部ナデ 胎土は鈍い黄橙色で黒雲母・赤色粒子・泥岩粒・海綿骨針を含む
17	5面 落ち込み2	不明 木製品	口径cm 底径cm 器高cm 浅い切り込みが入る 六角形になるように面取りしているか 織り関係の道具の可能性あり

表3 出土遺物計量表

		1面包含層		1面		2面		3面		4面		5面		5面下		総計			
古代以前	古代土師器	0	0.00%	4	3.81%	1	0.20%	0	0.00%	22	4.12%	10	2.26%	11	47.83%	49	2.82%		
	古墳土師器	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.23%	0	0.00%	1	0.06%		
	縄文土器	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.19%	1	0.23%	0	0.00%	2	0.12%		
土器	土師器皿	T種	大	1	2.44%	2	1.90%	1	0.20%	4	5.13%	10	1.87%	16	3.62%	2	8.70%	36	2.07%
			大	38	92.68%	83	79.05%	469	92.50%	59	75.64%	387	72.47%	348	78.73%	9	39.13%	1396	80.46%
		R種	中	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	1.28%	1	0.19%	0	0.00%	0	0.00%	2	0.12%
			小	1	2.44%	10	9.52%	25	4.93%	3	3.85%	17	3.18%	36	8.14%	0	0.00%	92	5.30%
			極小	0	0.00%	0	0.00%	1	0.20%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.06%
	R種白色系	大	0	0.00%	1	0.95%	0	0.00%	2	2.56%	24	4.49%	11	2.49%	1	4.35%	39	2.25%	
		小	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.19%	1	0.23%	0	0.00%	2	0.12%	
瓦質土器	火鉢	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	1.28%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.06%		
土製品	羽口	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.19%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.06%		
国産陶器	常滑	壺	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.19%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.06%	
		甕	0	0.00%	2	1.90%	0	0.00%	0	0.00%	2	0.37%	1	0.23%	0	0.00%	5	0.29%	
		片口鉢	I類片口鉢	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	1.28%	1	0.19%	0	0.00%	0	0.00%	2	0.12%
			II類片口鉢	0	0.00%	0	0.00%	1	0.20%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.06%
瓦	平瓦	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.19%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.06%		
舶載陶磁器	青白磁	合子	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	1.28%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.06%	
	白磁	不明	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	1.28%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.06%	
	褐釉	壺	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.19%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.06%	
金属製品	錢	中国銅錢	0	0.00%	0	0.00%	1	0.20%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.06%	
	鉄	釘	1	2.44%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.06%	
	銅	金具	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.23%	0	0.00%	1	0.06%	
石製品	滑石	鍋	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.19%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.06%	
		加工品	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.19%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.06%	
木製品	漆器	不明	0	0.00%	0	0.00%	1	0.20%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.06%	
		箸状木製品(両口)	0	0.00%	0	0.00%	1	0.20%	0	0.00%	3	0.56%	2	0.45%	0	0.00%	6	0.35%	
		箸状木製品(不明)	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	1.28%	7	1.31%	1	0.23%	0	0.00%	9	0.52%	
		折敷	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	3	0.56%	1	0.23%	0	0.00%	4	0.23%	
	漆器以外木製品	板草履	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	4	0.75%	0	0.00%	0	0.00%	4	0.23%	
		不明木製品	0	0.00%	2	1.90%	1	0.20%	0	0.00%	4	0.75%	2	0.45%	0	0.00%	9	0.52%	
		棒状木製品	0	0.00%	0	0.00%	3	0.59%	1	1.28%	12	2.25%	3	0.68%	0	0.00%	19	1.10%	
		板状木製品	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	11	2.06%	3	0.68%	0	0.00%	14	0.81%	
		串状木製品	0	0.00%	0	0.00%	1	0.20%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.06%	
球状木製品	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	2	0.37%	0	0.00%	0	0.00%	2	0.12%			
形代	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.23%	0	0.00%	1	0.06%			
自然遺物	骨	獸骨	0	0.00%	0	0.00%	1	0.20%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.06%	
		不明	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	3	0.56%	2	0.45%	0	0.00%	5	0.29%	
	種子	松かさ	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	1.28%	7	1.31%	0	0.00%	0	0.00%	8	0.46%	
		トチ	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	1.28%	4	0.75%	0	0.00%	0	0.00%	6	0.35%	
		桃	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	1.28%	2	0.37%	0	0.00%	0	0.00%	3	0.17%	
	くるみ	0	0.00%	1	0.95%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.06%		
合計		41	100%	105	100%	507	100%	78	100%	534	100%	442	100%	23	100%	1735	100%		



第四章 まとめと考察

1. 遺構の変遷と年代

1期

V面が相当する。調査区中央部で井戸(井戸1)が検出され、東側に山側へと落ちていく落込み(落込み2)が検出された。調査区東側で検出されたことや、大部分を上層遺構により削平されていることから、この落込みの性格を特定するには至らなかった。

落込み内の出土遺物の中に13世紀後半代に遡りうるものもあるが、その主体は13世紀末以降のものであることから、本期の年代は13世紀第4四半期以降14世紀第3四半期までのいずれかの時期とみるのが妥当か。

2期

IV面が相当する。調査区の大部分を落込み(落込み1)が占める。この落込みとIV面の比高差は10cm～30cmほどとなっており、調査区の南側(谷尻側)より北側(谷口側)のほうが比高差が小さくなっている。この落込みは調査区外へと広がっているため、全容を明らかにすることはできなかったが、西側(谷側)と北側(谷口側)へと広がっていること、IV面の標高が西側隣地の現在の標高面とおおよそ一致することから、平場を形成する際に作られた段部を落込みとして認識した可能性が高い。

出土遺物は落込み内の東南隅からの出土が大部分を占める。IV面全体で見ると、13世紀中頃まで遡るものを含みつつも、落込み内の出土遺物が13世紀末以降のものであることから、本期の年代は13世紀第4四半期以降14世紀第3四半期のいずれかの時期とみてよいだろう。

3期

Ⅲ面が相当する。2区において溝部材を残す溝(溝1)が検出されている。この溝の軸線は、山裾の等高線と合致してくる可能性も考えられるため、区画溝あるいは境界を示す溝の可能性を指摘できる。

出土遺物が乏しいため、年代を求めるまでには至らないが、数少ない出土遺物も13世紀末以降のものであることから、上限は13世紀末といえる。

4期

Ⅱ面が相当する。遺構の検出は小穴1穴と遺物集中(遺物集中2)のみである。遺構の検出が貧弱であることから、この面を生活面と評価できるかどうかは不明である。当面で確認された遺物集中2であるが、灰茶色粘質土内に遺物の破片が大量に混入した状態で検出された。遺物集中2の性格について明言は避けるが、地行を行う過程で遺物片が混入した粘質土をなんらかの理由で充填した可能性も指摘しておきたい。

微細破片の出土が多いため、年代を特定するのは非常に困難である。遺物の最も多い遺物集中2において出土した土師器皿は概ね13世紀末～14世紀中葉までのものであるが、常滑Ⅱ類片口鉢は9型式のもので、15世紀前半の年代が与えられているものである。ただし、常滑Ⅱ類片口鉢には13世紀後半から14世紀前半にかけて口縁形状のバリエーションが豊富で整理しきれていない⁽¹⁾、13世紀末以降編年の細分化が困難で(中野2012)、かつ編年に問題点も指摘されていることから(築瀬2008)、ここでは常滑Ⅱ類片口鉢の年代観には積極的に従わない。

出土遺物からみて当期も上限は13世紀末と考える。ただし、15世紀前半に、13世紀末から14世紀中頃にかけての遺物片を含む土をいずれかの地から当地に運びこんだ、と解釈する余地があることは付記しておく。

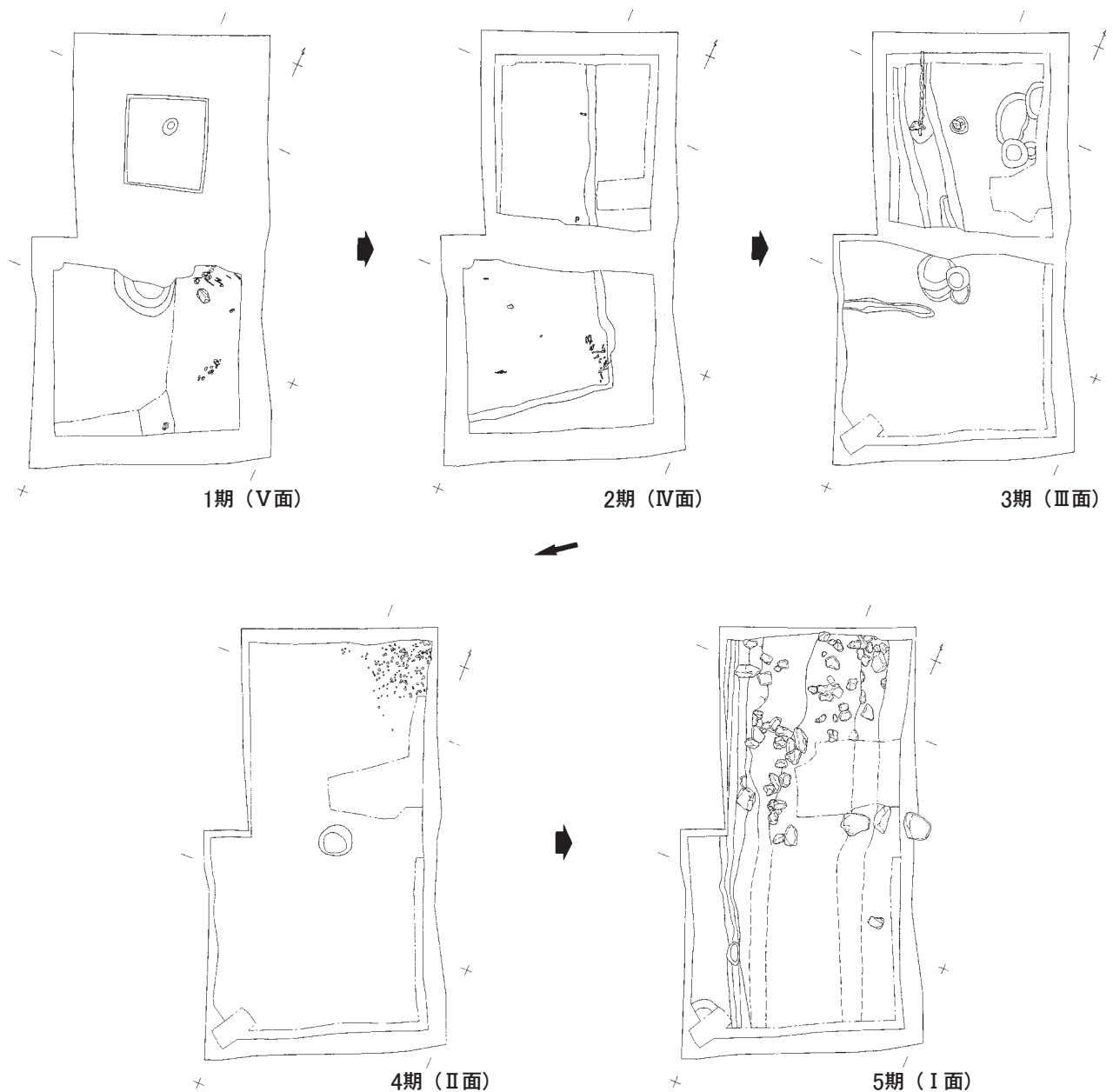


図14 遺構変遷図

5期

I面が相当する。調査区を南北に縦断する土塁状遺構とその西側(谷側)に小溝(小溝1)を検出した。小溝1のある西側(谷側)のほうが、土塁状遺構を挟んだ東側(山側)よりも標高が低いこと、土塁状遺構と主軸方位がほぼ一致すること、流下方向は南側(谷尻側)から北側(谷口側)へとなっていることなどから、土塁状遺構に付属する排水溝の可能性を考えたい。また土塁状遺構に関しても、本来の山の等高線にほぼ平行する関係で構築されていることや、谷戸内に位置すること、山側のほうが標高が高いことから、防御を意識した施設というより、区画や境界を意識して構築されたと考えられる。

出土遺物が乏しいため、明確なことは言えないが、13世紀末以降のいずれかの時期に構築されたと考えられる。

2. 調査地点周辺の土地造成について

調査地点周辺の地形は図16に示すように、階段状の平場に各々一軒ずつ住宅が建てられている。このような造成が行われる場合、一般的には図17のように盛土と切土を組み合わせることで造成されるが、当地点においては、地表面下150cmほどのV面より上層は確実に中世以降の盛土である。このことから、中世以降の土地造成の繰り返しにより、現在の階段状の地形が形成されたことは明確である。この階段状の造成がどのような過程で構築されていったのかを本項では考察していきたい。

図18は、自然災害を主要因とする時に階段状の盛土が形成されるケースを模式図として示したものである。盛土は特有の脆弱性を抱えている⁽²⁾ことから、盛土の崩落を原因として階段状の造成が行われた可能性そのものを否定することはできない。図19は人為的な造成のみで階段状の盛土が形成されるケースを模式図として示したものである。現実には人為的なものと災害によるものが複合していると考えるのが妥当であろう。

これらをふまえて調査地点周辺についてみていく。まず、谷戸中央部を南北に縦断する道路面の標高であるが、都市計画基本図によると、調査区正面の道路面の標高は11.8mとなっている。当調査で確認した確実な自然堆積層(地山)(図4最終深掘り坑北壁土層断面12層)の西側(谷側)の標高は12.08mであることから、これより上層を盛土ないし地滑り堆積とすることは、矛盾しているとは言えない。

次に、V面の標高だが、当地点で検出されたのは地表面下150cmほどの13.00m前後である。西側隣地(図15-2、図16-2)と当地点の標高差も、目測ではあるが140cm~150cmほどとなっている。これらのことから、西側隣地はIV面ないしV面の標高を保持している可能性がある。



図15 調査地点周辺図(1/2500)

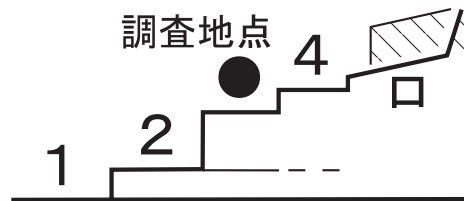


図16 調査地点周辺断面概念図

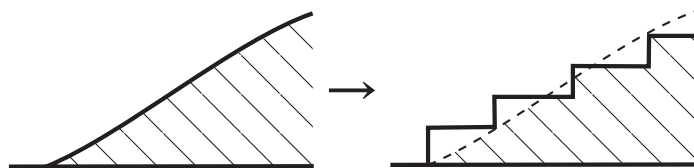


図17 階段状造成模式図(1)

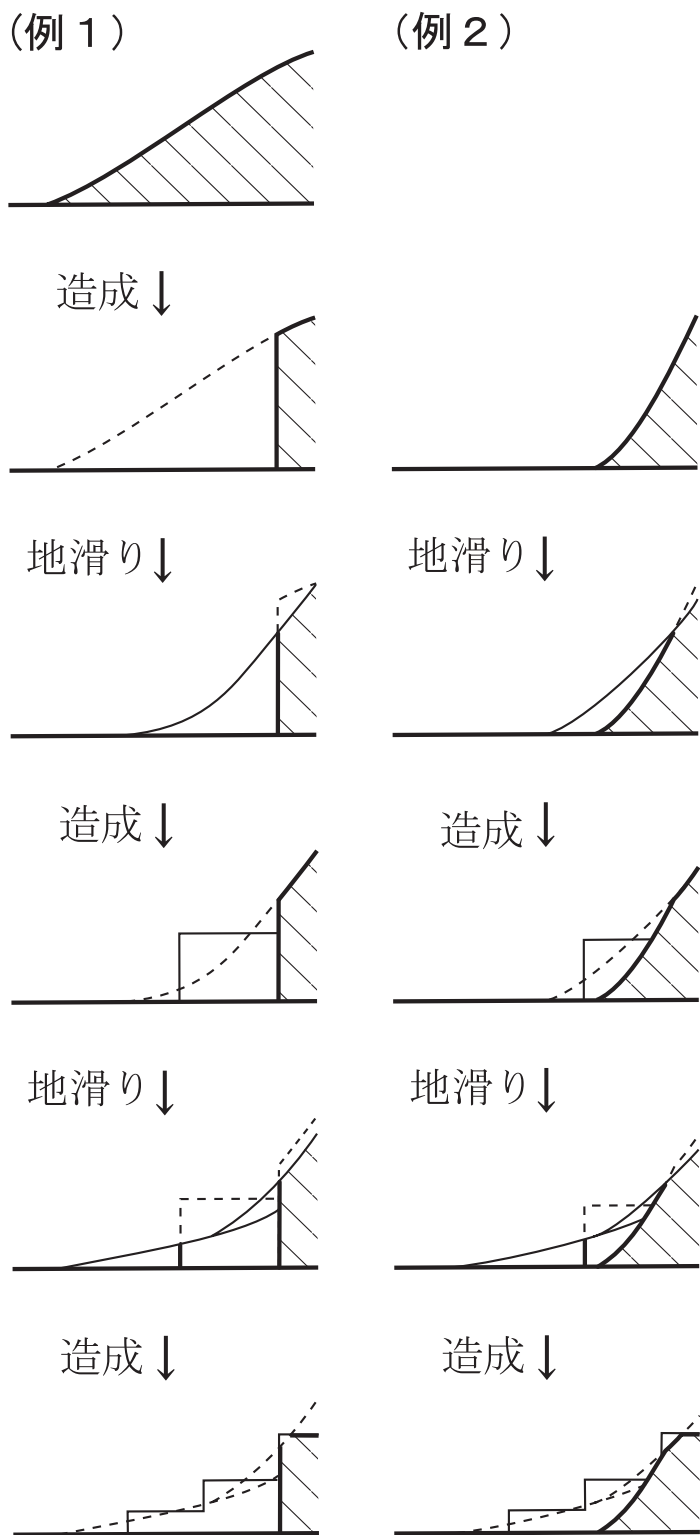


図18 階段状造成模式図(2)

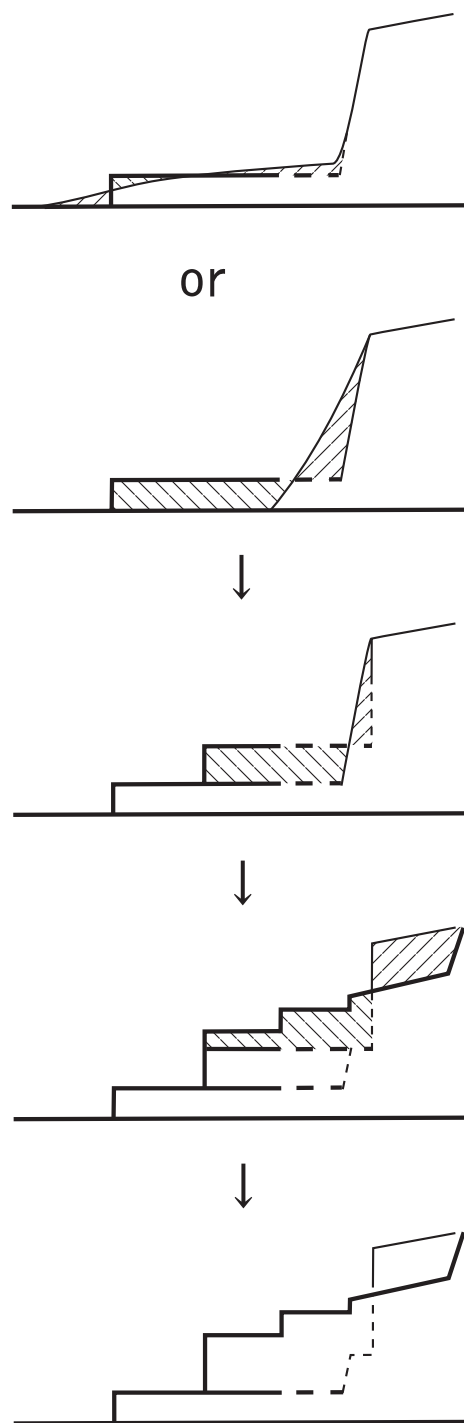


図19 階段状造成模式図(3)

図15-口地点は北側の岩盤が平面的にはほぼ直角に、かつ垂直に切られていることから、人為的に形成されたものであることが想像できる。現在この平地は墓所となっているが、石塔の型式からみて幕末・近代初頭まで遡ることは間違いない。さらに、5期の土塁状遺構はこの図15-口の平地の正面に位置するため、この平地と関連する施設として構築された可能性がある(宝蓮寺跡佐助二丁目905番3)

地点の調査では、奥に構築された平場を圍繞する土塁状遺構が検出されている)。もっともこの土塁状遺構自体、検出範囲内に限っては、谷戸の地形に沿った軸を示しているため、谷戸内における区画・境界を示す施設である可能性もある。ただ、図15-ロの平場の道を挟んだ西側、現在の東光寺の裏手にも同様に方形に切り開かれた平場(図15-イ、図版9-1)が形成されており、これら両者が対をなしている可能性もある。このような状況を鑑みて、図15-ロの平場を形成した際の残土によって、最終的な盛土と土塁状遺構の構築がなされた、と評価すること自体は、現時点では可能性の一つとして考えておかなければならない。また、大規模な土木工事が行われていると考えるならば、大慶寺が栄えた時期に行われた土木工事である、という推測も成り立つ。こうした状況をふまえると、図15-イ・ロの平場が形成された時期が中世まで遡る、と考える余地は十分にある。

今回の調査で明確になったことは、現在の地表面下150cmほどの標高13.00 mにあるV面より上層は盛土により形成されたことのみである。V面下の堆積を人為堆積によるものか自然堆積によるものか明確にしえなかったことは残念であるが、今後、調査地点周辺の造成の歴史を知るために必要な情報がなにか、ということがある程度見えてきたことが成果とも言える。

まず、V面より下層はどこから人為堆積で、どこまでが自然堆積なのかが明確になることにより、調査地点周辺で人的営為の始まる段階で、現在の道路面とほぼ同じ標高で平坦面が形成されていたのか、あるいはV面の標高で平坦面が形成されていたのか、いつから盛土が始まったのか、といったようなことが判明するであろう。

次に、図4のI区南壁土層断面のⅢ面の西側に落ちる傾斜やI区北壁土層断面の12層の堆積は、盛土崩落を原因として形成された可能性を指摘できることから、土層堆積の状況が明らかになることにより、人為的な盛土のみで階段状の地形が形成されたのか、自然災害による地形改変を伴いながら階段状の地形が形成されたのかが明らかになるであろう。

また、5期に構築された調査区外へと延びている土塁状遺構が、どのような経路でどこまで続いているのか、どの時期に構築されたのか、といったことや、この土塁状遺構と図15-ロの平場とに関連性があるのかないのか、といったことは今後重要な課題となる。

3. 大慶寺と周辺の古道

図20は大正10年測図の2万5千分1地図(鎌倉・国土地理院謄本)に加筆したもので、図21は明治15年測図の迅速測図((財)日本地図センター発行)に記載されている道を、明治36年測図の5万分1地図(横須賀・国土地理院謄本)と大正10年測図の2万5千分1地図(鎌倉・国土地理院謄本)を元に、2千5百分1都市計画基本図(平成16年修正)に加筆したものである。



図20 大正10年(1921年)の調査地点周辺(1/25000、国土地理院謄本に加筆)



図21 平成16(2004年)の調査地点周辺(1/5000)

現在も残る江ノ島道道標(図版9-2・3・4)を南に折れ、昭和30年代に開発された広大な住宅地に寸断されるまでは、ほぼ現在の道と重なることがわかる。これより南は住宅地により旧地形をほとんど留めていないが、旧道が富士塚(図版9-5)の西側を通っていることが窺える。富士塚の周辺の尾根筋は図20の等高線から判断すると、緩やかな傾斜が台地状に広がっていることが窺え、台地のへりを通る選択は理にかなっているといえる。また富士塚の周囲からは縄文土器や石器の出土が報告されており(赤星1959)、住居址の存在も想定されている(神奈川県史編纂室1979)ことから、この台地状の地形は縄文中期には既に形成されていた可能性もある。

この富士塚の南、図21-1のマンションの位置で上町屋へと向かう尾根道が西に分岐している。このマンション建設の際に事前調査が行われ、この時に尾根筋に道状遺構が検出されており、これが上町屋へと向かう道に相当する。ここから尾根筋を上町屋へと向かうルートがかつての江ノ島道になる(鎌倉教育研究所1979)。江ノ島道の分岐から南は山腹を這うようにして下る坂で、かつては狐坂と呼ばれており(大正十年測図の地形図に記載あり)、この坂を下ると大慶寺の所在する谷戸に着く。

大慶寺から西方へ向かう道沿いには文和五年銘の宝篋印塔(「泣塔」)がある。この宝篋印塔は地図にある旧道のほうを向いていることから、この宝篋印塔は原位置を保っている可能性がある。

明治15年の段階で記載されている道は、経路上に近世の遺構を残す状況からしても、近世まで遡ることは確実であろう。また現況は大きく改変されており、実際に確認することが適わない場所も多いが、地図上で確認する限り、沢から尾根への取り付け方、尾根筋の巻き方など、ルートの設定としては理にかなっているといえよう。こう考えると、このルートが中世まで遡る可能性は十分にある。

大慶寺の所在する谷戸の西方の山崎・上町屋・寺分一帯にかけては、かつて洲崎と呼ばれていた地域であり、『皇国地誌』にも常盤村・梶原村・寺分村・上町屋村・山崎村が洲崎郷とある。第一章で述べたように、洲崎において新田義貞軍と赤橋守時の間で合戦が行われている。こうしたことから、大慶寺の所在する地点は、鎌倉の外縁であり、鎌倉から片瀬・江ノ島方面あるいは藤沢方面へのルート上に位置すると評価することもできよう。

(沖元)

註

(1) 中野晴久氏ご教示による

(2) 筆者は盛土の崩落について土木工学の視点で指摘することはできない。web上において国・自治体・土木工学・土木業界等が盛土崩落についての解説・報告書を多数公開しているため、専門家によるそちらの解説を参照されることを望む。

引用・参考文献(本報全体に共通)

赤星直忠1959 『鎌倉市史 考古編』吉川弘文館

丑野毅1974 「神奈川県鎌倉市台遺跡調査報告書」『人文科学紀要』第59輯 東京大学教養学部人文科学科

宇都洋平・原廣志2012 「宝蓮寺跡(佐助二丁目905番3)」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書28(第1分冊)』鎌倉市教育委員会

大河内勉1996 『台山藤源治遺跡 一第2次調査報告一』台山遺跡発掘調査団

神奈川県史編纂室編 1979 『神奈川県史 資料編20 考古資料』神奈川県史編纂室

鎌倉教育研究所編1979 『かまくら子ども風土記(改訂九版)』鎌倉市教育委員会

川副武胤・貫達人1959 『鎌倉市史 社寺編』吉川弘文館

黒田基樹2005 『戦国北条一族』新人物往来社

斉木秀雄・宗墓秀明1985 「台山遺跡」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』1 鎌倉市教育委員会

宗墓秀明1993 『台山藤源治遺跡 一第三次調査報告一』台山遺跡発掘調査団

玉林美男・新国哲也1988 「台山遺跡」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』4 鎌倉市教育委員会

土屋浩美2002 「寺分藤塚遺跡 寺分1丁目502番1他19筆所在」『鎌倉の横穴墓 一調査報告と資料集成一』東国歴史考古学研究所

手塚直樹・及川良彦1985 『台山藤源治遺跡』台山藤源治遺跡発掘調査団

中野晴久2012 「常滑窯の展開」『中世渥美・常滑焼をとおって 第25回日本福祉大学知多半島総合研究所歴史・民俗部研究集会シンポジウム資料』

築瀬裕一2008 「中世後期の常滑焼片口鉢の編年について-東国の消費地遺跡における検討から-」『芹沢長介先生追悼 考古・民族・歴史学論叢』六一書房

若松美智子ほか2001 「水道山遺跡(No.20) 台四丁目1169番1地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』18 第2分冊鎌倉市教育委員会



1-1 調査地点近景 (北から)



1-2 調査地点近景 (南から)



1-3 調査地点遠景 (南西から)



1-4 東光寺境内所在板碑

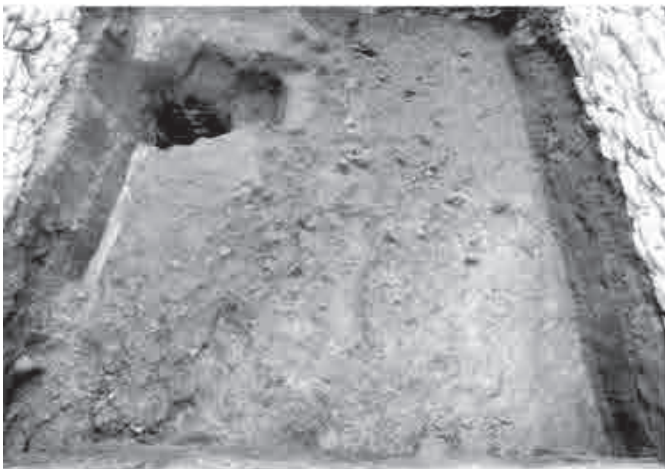
図版2



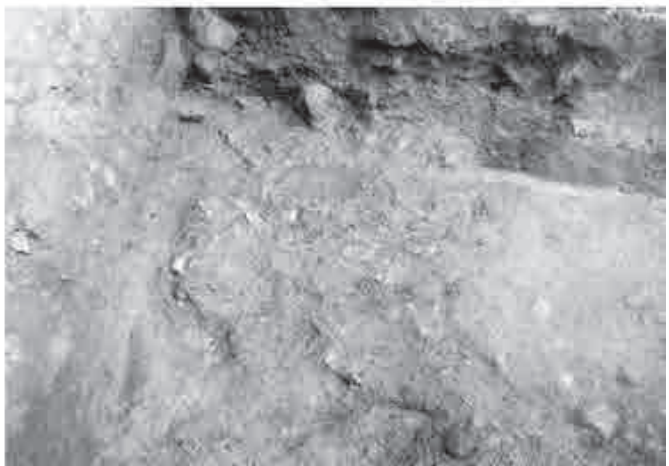
2-1 2区I面全景(北から)



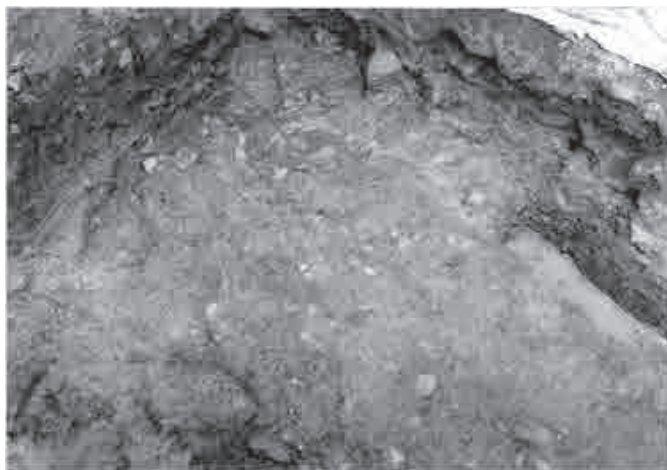
2-2 2区I面全景(南から)



2-3 2区II面全景(北から)



2-4 2区II面遺物集中2(西から)



3-1 2区Ⅱ面遺物集中2 (南西から)



3-2 2区Ⅲ面全景 (北から)



3-3 2区Ⅲ面溝1 (西から)



3-4 2区Ⅲ面溝1 (北から)

図版4



4-1 1区IV面全景(北から)



4-2 2区IV面全景(北から)



4-3 1区IV面落込み1内遺物集中(西から)



5-1 1区V面全景(北から)



5-2 2区V面全景(北から)



5-3 1区V面落込み2内遺物集中(南から)



5-4 1区V面落込み2内遺物集中(西から)



6-1 1区V面落込み2内遺物(図11-16)出土状況



6-2 1区V面井戸1(南から)



6-3 2区最終深掘り坑(西から)



7-1 1区南壁土层



7-2 1区北壁土层



8-1 2区北壁土層



8-2 2区最終深掘り坑北壁土層



9-1 図15-イ 東光寺裏平場



9-2 江ノ島道道標(1)(山崎)



9-5 富士塚

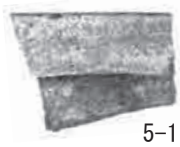


9-3 江ノ島道道標(2)(山崎・拡大)



9-4 江ノ島道道標(3)(山崎・拡大)

図版 10



5-1

1 面包含層



6-3

2 面 遺物集中 2



6-4



6-5

6-6



9-1

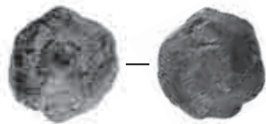


9-2



9-3

9-4



9-6



9-7



9-8



9-9

4 面 面上



10-10

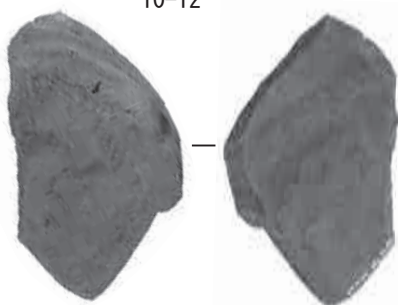


10-11



10-12

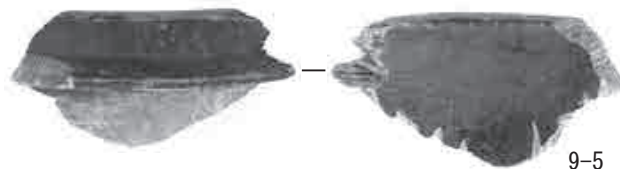
10-13



10-14



10-16



9-5

4 面 包含層



10-17



10-18



10-19



10-20



10-21



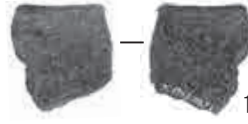
10-22

4 面 落込み 1

4 面 落込み 1 内 遺物集中 1



11-1



11-2



11-3



11-4



11-5



11-6



11-7



11-8



11-9



11-10



11-11



11-12



11-13



11-14



11-15



11-16

5 面 落込み 2
出土遺物